

頭川城ヶ平横穴墓群調査報告Ⅲ

—— 平成10～12年度、頭川地区雪崩対策事業に伴う調査 ——

2001年3月

高岡市教育委員会

序

高岡市の北西部の丘陵は、西山丘陵と呼ばれています。ここに飛鳥時代の横穴形式の墳墓である横穴墓群が2群分布しています。江道横穴墓群と今回報告する頭川城ヶ平横穴墓群です。

江道横穴墓群は人家に近いこともあり、江戸時代にはその存在が知られていません。昭和30・31年に現地踏査・発掘調査が行われ、その内容が明確になりました。

頭川城ヶ平横穴墓群は、昭和57年に土砂採取工事中に新たに発見されたものです。昭和57・58年に確認調査・発掘調査が実施され、20基からなる横穴墓群であることが判明しました。

この度、頭川地区において富崩対策工事が実施されることになり、この横穴墓群の発掘調査を実施いたしました。この結果、新たに3基の横穴墓の存在が確認されました。また分布状況により、当横穴墓群にはまだ未確認の横穴墓の存在することが推定されるに至りました。

最後になりましたが、この調査に御協力頂きました、関係各位、地元の皆様には感謝の意を表します。

平成13年3月

高岡市教育委員会
教育長 細呂木 六良

例 言

1. 本書は、頭川地区雪崩対策事業に伴う、頭川城ヶ平横穴墓群発掘調査の報告書である。
2. 当調査は、富山県高岡土木事務所の委託を受けて、高岡市教育委員会文化財課が実施した。
3. 調査地区は、富山県高岡市頭川である。
4. 現地調査は、平成10～12年度に実施した。各年度ごとの内容は以下の通りである。
平成10年度：北東側工区より工事中に横穴が発見され、現地確認と記録作成を実施した。
平成11年度：南東側工区の試掘調査を実施した。現地調査期間は、平成11年8月2日～同年10月29日である。
平成12年度：南東側工区（平成11年度試掘調査地区）の本調査を実施した。現地調査期間は、平成12年4月4日～同年6月30日である。
5. 調査関係者は以下の通りである。
文化財課長：宮村勝博
課長補佐：大石 茂
[埋蔵文化財担当]
主幹：石浦正雄（平成10・11年度）
主幹：天谷隆夫（平成12年度）
主査：山口辰一
文化財保護主事
根津明義・荒井 隆・太田浩司
6. 当調査は、山口・荒井が担当して実施し、日沖剛史（山武考古学研究所調査研究員）が補佐・協力した。
7. 当遺跡については、当教育委員会から『富山県高岡市頭川城ヶ平横穴墓群—第Ⅰ次緊急発掘調査概要』と『富山県高岡市頭川城ヶ平横穴墓群—第Ⅱ次発掘調査報告』の2冊の報告書を刊行している。本書はこれに続くものであるので『頭川城ヶ平横穴墓群調査報告Ⅲ』と題した。
8. 本書における遺構記号は、以下の通りである。
SX—その他の横穴（近代の貯蔵穴・近代の地下水の取入口、性格不明横穴）
SZ—墳墓（古代の横穴墓）
9. 本書における横穴墓等の表記において、主軸は入口側から奥側を向いた方向で示している。「左袖側」の表現については、奥側から入口側を見た状態で示している。
10. 本書における土層は、以下の通りである。
1. 黒褐色土、2. 褐色砂質土、3. におい黄褐色砂質土、4. 黄褐色土、
5. 黄褐色砂質土、6. におい黄白色砂質土、7. 黄白色砂質土、a. 岩盤粒混じり、
b. 近現代の土
11. 図版として掲載した写真の内、図版8は昭和58年度調査時のものである。
12. 現地調査及び報告書作成において、以下の各氏より御教示、御援助を得た。
池野正男、大野 究、岡本淳一郎、小島俊彰、久々忠義、斎藤 隆、酒井重洋、
西井隆儀、橋本正春（順不同、敬称略）
13. 本書の執筆は、「調査に至る経緯」を山口が担当し、これ以外は日沖が担当で山口・荒井が加除・修正した。

目 次

序

例言

目次

第1章	序 説	1
第1節	遺跡概観	1
第2節	調査概観	9
第2章	遺 構	17
第1節	横穴墓	17
	【第301～303号墓】	
第2節	その他の横穴	19
	【第1～12号横穴】	
第3章	結 語	21

図 面 目 次

図面1	遺構実測図	図面配置図 (1/1,000)
図面2	遺構実測図	平成10~12年度調査遺構全体平面図 (1/400)
図面3	遺構実測図	平成10~12年度調査遺構全体正面図 (1/400)
図面4	遺構実測図	平成10年度調査遺構平面図 (1/200)
図面5	遺構実測図	平成10年度調査遺構正面図 (1/200)
図面6	遺構実測図	平成11・12年度調査遺構平面図 (1/200)
図面7	遺構実測図	平成11・12年度調査遺構正面図 (1/200)
図面8	遺構実測図	昭和57・58年度調査遺構全体平面図 (1/400)
図面9	遺構実測図	昭和57・58年度調査遺構全体正面図 (1/400)
図面10	遺構実測図	昭和57・58年度調査遺構平面図〔1〕 (1/200)
図面11	遺構実測図	昭和57・58年度調査遺構正面図〔1〕 (1/200)
図面12	遺構実測図	昭和57・58年度調査遺構平面図〔2〕 (1/200)
図面13	遺構実測図	昭和57・58年度調査遺構正面図〔2〕 (1/200)
図面14	遺構実測図	昭和57・58年度調査遺構平面図〔3〕 (1/200)
図面15	遺構実測図	昭和57・58年度調査遺構正面図〔3〕 (1/200)
図面16	遺構実測図	第301号墓全体図 (1/40)
図面17	遺構実測図	第301号墓土層断面図 (1/40)
図面18	遺構実測図	第302号墓全体図 (1/40)
図面19	遺構実測図	第302号墓土層断面図 (1/40)
図面20	遺構実測図	第303号墓全体図 (1/40)
図面21	遺構実測図	第303号墓土層断面図 (1/40)
図面22	遺構実測図	第1・2号横穴全体図 (1/80)
図面23	遺構実測図	第3・5号横穴全体図 (1/80)
図面24	遺構実測図	第4・6号横穴全体図 (1/80)
図面25	遺構実測図	第7・8号横穴全体図 (1/80)
図面26	遺構実測図	第9・10号横穴全体図 (1/80)
図面27	遺構実測図	第11号横穴全体図 (1/80)
図面28	遺構実測図	第12号横穴全体図 (1/80)

図 版 目 次

- 図版 1 遺跡 1. 遺跡遠景 (北西)
2. 遺跡遠景 (南東)
- 図版 2 遺跡 1. 遺跡全景 (西)
2. 遺跡全景 (南西)
- 図版 3 遺跡 1. 平成10年度調査地区遠景 (南西)
2. 平成10年度調査地区近景 (西)
- 図版 4 遺跡 1. 平成11・12年度調査地区全景 (南西)
2. 平成11・12年度調査地区全景 (西)
- 図版 5 遺跡 1. 平成11・12年度調査地区近景 (北西)
2. 平成11・12年度調査地区近景 (西)
- 図版 6 遺構 1. 第301・302号墓全景 (西)
2. 第303号墓全景 (北西)
- 図版 7 遺構 1. 第301号墓近景 (西)
2. 第302号墓近景 (西)
- 図版 8 遺跡 1. 昭和57・58年度調査地区全景 (南)
2. 昭和57・58年度調査地区全景 (南西)
- 図版 9 遺跡 1. 遺跡遠景 (西)
2. 遺跡遠景 (南西)
- 図版10 遺跡 1. 平成10年度調査地区遺構確認状態 (南西)
2. 平成10年度調査地区遺構確認状態 (南西)
3. 平成10年度調査地区協議状況 (南西)
- 図版11 遺跡 1. 平成10年度調査地区遠景 (西南西)
2. 平成10年度調査地区遠景 (南西)
- 図版12 遺跡 1. 平成10年度調査地区近景 (南西)
2. 平成10年度調査地区近景 (西)
- 図版13 遺跡 1. 平成11・12年度調査地区遠景 (南西)
2. 平成11・12年度調査地区遠景 (西)
- 図版14 遺跡 1. 平成11・12年度調査地区調査前風景 (北西)
2. 平成11・12年度調査地区調査前風景 (南)
3. 平成11・12年度調査地区調査前風景 (北西)
- 図版15 遺跡 1. 平成11・12年度調査地区全景 (西)
2. 平成11・12年度調査地区全景 (西)
- 図版16 遺跡 1. 平成11・12年度調査地区近景 (西)
2. 平成11・12年度調査地区近景 (北西)
- 図版17 遺跡 1. 平成11年度試掘調査風景 (北西)
2. 平成11年度試掘調査風景 (北)
3. 平成11年度試掘調査風景 (南西)

- 図版18 遺跡 1. 平成11年度試掘調査風景 (北西)
2. 平成11年度試掘調査風景 (南西)
3. 平成11年度試掘調査風景 (南西)
- 図版19 遺跡 1. 平成12年度本調査風景 (北)
2. 平成12年度本調査風景 (南)
3. 平成12年度本調査風景 (北西)
- 図版20 遺構 1. 第301・302号墓全景 (西)
2. 第301・302号墓近景 (西)
- 図版21 遺構 1. 第301号墓全景 (西)
2. 第301号墓全景 (西南西)
- 図版22 遺構 1. 第301号墓玄室検出状態 (西)
2. 第301号墓見送り (東)
3. 第301号墓調査風景 (西南西)
- 図版23 遺構 1. 第302号墓全景 (南西)
2. 第302号墓全景 (南西)
- 図版24 遺構 1. 第302号墓確認状態 (西)
2. 第302号墓調査風景 (南西)
3. 第302号墓調査風景 (南西)
- 図版25 遺構 1. 第303号墓全景 (西)
2. 第303号墓全景 (北西)
- 図版26 遺構 1. 第303号墓確認状態 (西)
2. 第303号墓調査風景 (北)
3. 第303号墓調査風景 (西)
- 図版27 遺構 1. 第1・2号横穴全景 (南)
2. 第1・2号横穴全景 (西)
- 図版28 遺構 1. 第1号横穴全景 (南西)
2. 第2号横穴全景 (南西)
3. 第3号横穴全景 (南西)
- 図版29 遺構 1. 第4号横穴全景 (南西)
2. 第5号横穴全景 (南西)
3. 第6号横穴全景 (西)
- 図版30 遺構 1. 第7号横穴全景 (西)
2. 第8号横穴全景 (西)
3. 第9号横穴全景 (西北西)
- 図版31 遺構 1. 第10号横穴全景 (西北西)
2. 第11号横穴全景 (西北西)
3. 第12号横穴全景 (西)

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図 [1] (1/15万)	2
第2図	遺跡位置図 [2] (1/5万)	3
第3図	現地形図と調査地区位置図 (1/5,000)	4
第4図	旧地形図と調査地区位置図 (1/5,000)	5
第5図	遺跡地図 [1] (1/1万5千)	6
第6図	遺跡地図 [2] (1/1万5千)	7
第7図	昭和57・58年度調査地区全体図 (1/300)	10
第8図	工事区域位置図 (1/7,500)	12
第9図	工事区域区分図 (1/2,500)	13
第10図	横穴墓・横穴分布図 (1/2,500)	14
第11図	平成10～12年度調査地区全体図 (1/300)	16
第12図	第1・2号横穴入口部実測図 (1/40)	18
第13図	横穴墓一覧図 (1/100)	23
第14図	県下の横穴墓群分布図 (1/100万)	26

挿 表 目 次

第1表	その他の横穴計測値一覧表	21
第2表	横穴墓群測値一覧表	22
第3表	横穴墓・横穴一覧表	24
第4表	県下の横穴墓群一覧表	27

調査参加者名簿

発掘

上田工、岡田一広、樋谷潤、河原康弘、小林央、佐野實、沢田和明、中山賢富、広沢隆太郎、古岡弘之、前田武國、山崎一男、山城一夫

整理

井田まさみ、上田品子、梅沢征津子、岡田一広、小川由紀、樋谷潤、樋谷知世、笠谷幸代、金田あゆみ、鎌仲勝子、川井理恵子、北山幸子、神笠友里、小林央、三箇正子、嶋山健治、新谷晴紀子、高井久美、高口直美、高島洋、高田えみ子、瀧津子、寺井久子、道谷美奈子、中三希子、中村重久、仁木菜穂湖、西野有実、西野由香、藤崎文博、朴木香保利、三島幸代、村田智恵子、村田理恵、室崎真弓、山崎美和、山田梢

事務

片岡千賀子、田中美穂子

第1章 序 説

第1節 遺跡概観

1. 頭川城ヶ平横穴墓群

高岡市の北西域に西山丘陵が連なっており、その山裾には小矢部川が流れ、狭隘な平野部を形成している。小矢部川の一支流頭川(外古川)は、西山丘陵を南東方向へ流れ、開折谷を形成して小矢部川に合流する。いわゆる頭川谷である。この谷口の左岸すなわち北東側には、平野部へ突き出る形で丘陵が南東方向へ派生している。この丘陵端は「城ヶ平」と呼ばれている。ここの南西側の急斜面に当「頭川城ヶ平横穴墓群」が所在している。

当横穴墓群が所在する丘陵には、古墳状の形態をなす所が2箇所有り、男王塚・女王塚として伝承されてきた。1955年(昭和30年)に東京国立博物館の指導により試掘調査が実施されたが、古墳と断定されるまでには至らなかった。この丘陵は西山丘陵の最末端の部分として南東方向へ派生しているものである。現在は、土取りのため平野部側から約350m山側へ掘削を受けている。当横穴墓群が確認された所で丘陵尾部を切断した形で掘削は止っており、崩面を南東側に向けた形状となっている。

当横穴墓群は、昭和57年土砂採掘中に発見された。不詳発見の遺跡である。昭和57・58年に一部の横穴墓の発掘調査と全体の確認調査を行った。横穴墓は標高20~60mの間の山腹に20基確認されている。この内、3基は工事のため調査以前に消滅したものであり、6基は発掘調査を実施したものである。残り11基は現状保存されている。

当横穴墓群の位置する所は、頭川集落の南東側、岩坪集落の北西側である。大字では頭川と岩坪の境界付近である。字界は確定的なものではないが、頭川地区・岩坪地区に当横穴墓群が存在していると言える。遺跡範囲の中心部が大字頭川小字城ヶ平であり、また城ヶ平と通称される丘陵でもあり、「頭川城ヶ平横穴墓群」と称している。

平成10~12年度の発掘調査により、新たに3基の横穴墓を確認したので、当横穴墓群は23基の横穴墓から構成されていると言える。ただし未確認の横穴墓が存在している可能性が高い。时期的には飛鳥時代のものとしてよいと判断している。

2. 地理的歴史的環境

頭川

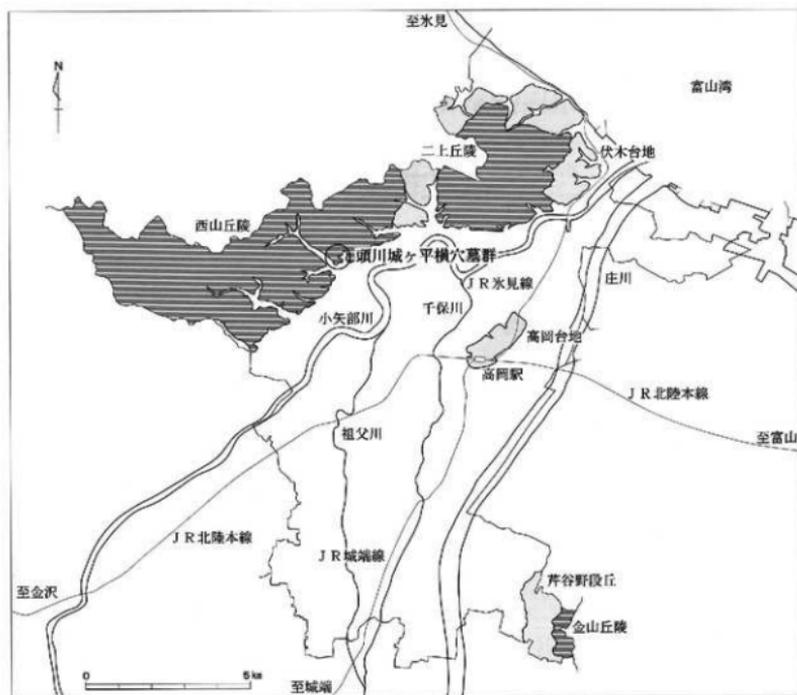
頭川地区は、高岡市北西部に連なる西山丘陵の開折谷中に位置し、谷部と平野部の境付近にまで展開している。谷の中心には、小矢部川の支流である頭川川と主要地方道高岡水見線が南東方向に並走し、その両側

に頭川集落・豊かな水田地帯が広がる。また、谷を包み込む西山丘陵は、石川県宝達山から派生し、二上山まで連なる丘陵地で、古墳群・横穴墓群等が集中する遺跡の宝庫としても知られている。

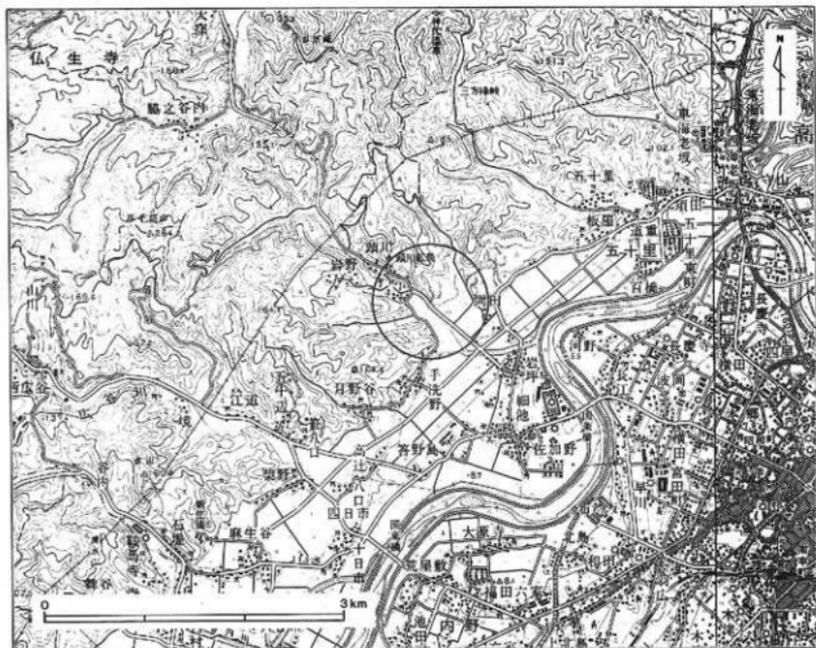
頭川地区は、江戸時代から明治22年までの頭川村で、その後、大字「頭川」としてその所在を国吉村から高岡市へ移しつつも、現在に至るまでその名を残している。当地区の南東側に岩坪（旧岩坪村）が隣接し、集落もしくは水田地帯を平野部に形成している。丘陵を隔てて、南側に手洗野（旧手洗野村）、南西側に月野谷（旧月野谷村）の各集落が位置している。

岩坪

本遺跡が立地する岩坪地区は、小矢部川左岸に位置し、北は頭川、南は細池、西は手洗野に接しており、地区内を小矢部川へ向かう頭川川が横切っている。古くから交通の要所として知られているが、その他に低湿地には水田が広がり、微高地には民家が集中している。また、北に見える西山丘陵の一部も同地区に含まれ、近年においては土砂の採取場として利用されている。



第1図 遺跡位置図 [1] (1/15万)



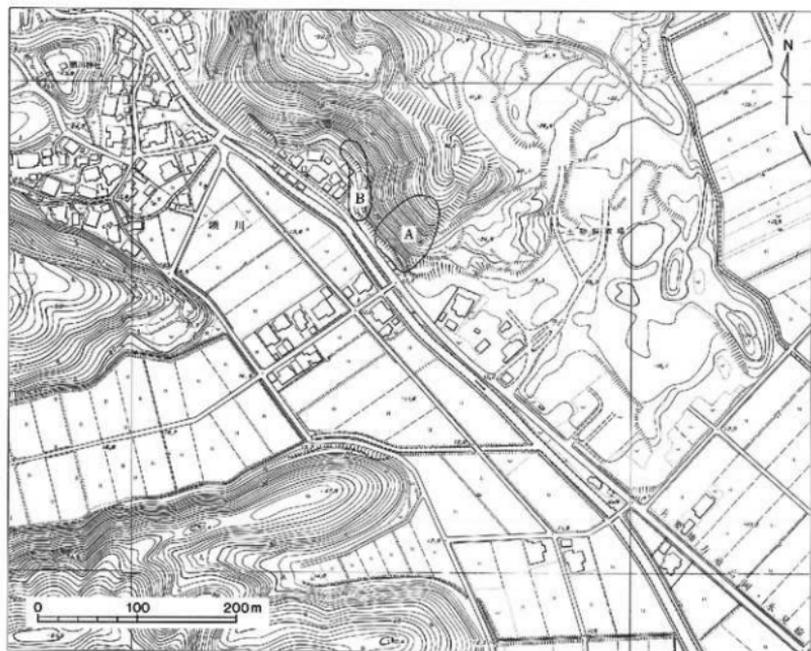
第2図 遺跡位置図【2】(1/5万)

「岩坪」の名称は、小矢部川の川原であった砂利の多い荒地を開いたことからついたといわれており、室町期には、すでにその名は使用されていたようである。康正元年12月27日の「足利義政権判御教書」には、「越中国岩坪保、小車次郎右衛門尉成行、領掌不可有相違」と記されており、国領の保名として扱われていたことが窺える。その後、江戸時代には、礪波郡国吉郷岩坪として主に交通の要所として機能し、幕府巡見上使通路（上使往來）や小矢部川を挟んで対岸の長江新村への渡し舟である岩坪渡などでにぎわったとされている。

現在は、頭川地区と同様で江戸時代から明治22年まで続いた岩坪村の名称を受けて、高岡市の大字としてその名を残している。

頭川川

別名、外古川とも言い、源を津々良峠とする小矢部川の支流である。南東方向に流路をもつ全長3kmの小河川で、大字名「頭川」の由来ともなっている。流路の過程で、頭川谷の水田地帯・集落を兩岸に臨み、左岸の薬師堂・靈泉堂、右岸の常清寺・頭川神社に見送られるように小矢部川へ向かう。水量は比較的多く、頭川谷及び岩坪に広がる水田を常に潤している為、古くから付近には集落も発展していたようである。



第3図 現地形図と調査地区位置図（1/5,000）

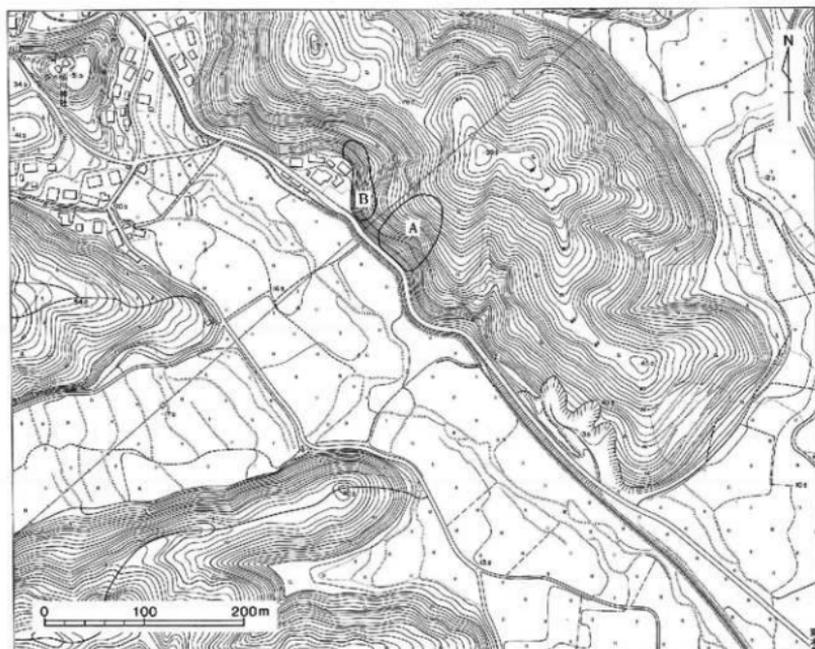
A—昭和57・58年度調査地区、B—平成10～12年度調査地区

西山丘陵

高岡市の北西部を走る丘陵で「西山丘陵」と呼称されている。石川県宝達山（637.4m）より派生し、三千防山（264.2m）を経て二上山（274m）まで連なる比較的低い丘陵である。なお、二上山は、現在高岡市内を一望できる山として知られているが、大伴家持によって詠われたように古来からひときわ目立った存在であったようである。

頭川付近の西山丘陵の地質は、主に新生代第三紀層の中新世・鮮新世にあたる北陸層群が占めており、その上を不整合に第4紀層の洪積世・沖積世にあたる富山層群が覆っている。さらに頭川城ヶ平横穴墓群の周辺は、北陸層群の谷内層（泥岩層）・頭川層（石灰質砂岩層）、その上に富山層群の上田子層（礫層）が順に地積している。頭川城ヶ平横穴墓群や江道横穴墓群は、谷内層もしくは頭川層に穿たれており、地質を選び出して構築していることが窺える。

現在においては、頭川層などの良質な石灰質砂岩層は、埋め立てや肥料として採掘されていることから、遺跡周辺の地形は、日々変化しているのが現状となっている。



第4図 旧地形図と調査地区位置図(1/5,000)

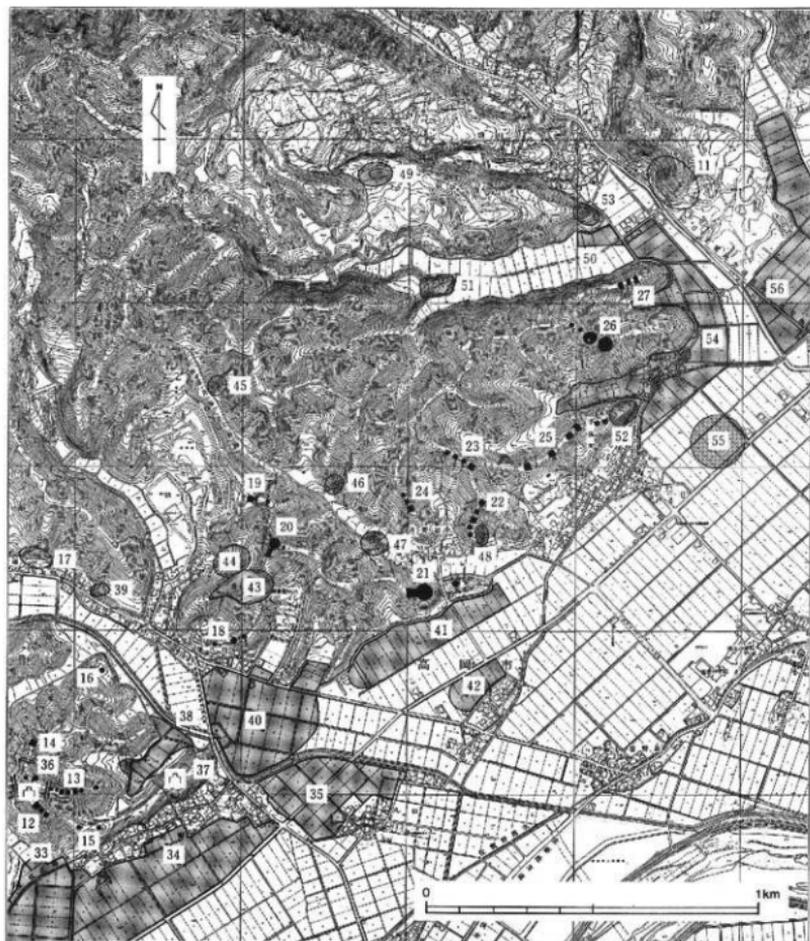
A-昭和57・58年度調査地区、B-平成10~12年度調査地区

交通路

『延喜式』によれば、越中国には板木、川人、日理、白城、磐瀬、水橋、布勢、佐味の8駅があり、駅馬が置かれ、砺波、射水、婦負、新川の4郡に伝馬が置かれたとされている。『延喜式』の駅路については、加賀と越中との国境を越えた後、小矢部川左岸、小矢部川とその西側の丘陵との間の狭隘な平野部を北東方向に進み、高岡市伏木にある越中国府方面へ延びていたとされている。

この『延喜式』からのルート設定より、平安時代前期頃には当横穴墓群の南側を古代北陸道の駅路が通っていたことになる。川人駅は高岡市と福岡町との行政区付近、日理駅は越中国府に隣接する伏木地内ないしこれより都に寄った二上地内に比定されている。当地はこれらの中間点と言うことになる。

奈良時代のルートについては、『延喜式』から直接読み取ることができないものの、平安時代前期と同様に小矢部川左岸を通っていた可能性がある。駅路が他の所を通っていたとしても、このルートは越中国府やその付近に推定される射水郡衙と砺波郡衙方面とを結ぶものであり、重要なものとの評価は変わらない。また、古墳時代や飛鳥時代でも遺跡の分布状態から重要なルートであったと推定される。



第5図 遺跡地図 [1] (1/1万5千)

11. 頭川城ヶ平横穴墓群、12. 柴野口割Ⅰ古墳群、13. 柴野口割Ⅱ古墳群、14. 柴野口割Ⅲ古墳群
 15. 柴野口割Ⅳ古墳群、16. 柴野春日古墳、17. 江道横穴墓群、18. 笹谷内古墳群
 19. 釈迦堂古墳群、20. 男狭古墳群、21. 立山古墳群、22. 道ヶ谷内Ⅰ古墳群、23. 道ヶ谷内Ⅱ古墳群
 24. 道ヶ谷内Ⅲ古墳群、25. 倉谷古墳群、26. 四十九古墳群、27. 安国山古墳群、33. 麻生谷遺跡
 34. 柴野遺跡、35. 八口遺跡、36. 柴野城ヶ平城跡、37. 柴野高の宮城跡、38. 柴野守善寺遺跡
 39. 円通庵遺跡、40. 笹八口遺跡、41. 宮田遺跡、42. 高辻遺跡、43. 篠八口岩跡、44. 釈迦堂遺跡
 45. 月野谷石飛遺跡、46. 月野谷大谷内遺跡、47. 月野谷干草遺跡、48. 道ヶ谷内遺跡
 49. 明田Ⅰ遺跡、50. 滝ヶ谷内Ⅰ遺跡、51. 滝ヶ谷内Ⅱ遺跡、52. 手洗野古墓群、53. 頭川古墓群
 54. 間尽遺跡、55. 手洗野赤浦遺跡、56. 岩坪岡田高遺跡



第6図 遺跡地図【2】(1/1万5千)

11. 頸川城ヶ平横穴墓群、26. 四十九古墳群、27. 安厩山古墳群、28. 板屋谷内A古墳群
 29. 板屋谷内B古墳群、30. 板屋谷内C古墳群、31. 五十里古墳群、32. 五十里道神社古墳群
 50. 滝ヶ谷内I遺跡、52. 手洗野古墓群、53. 頸川古墓群、54. 間尽遺跡、55. 手洗野赤浦遺跡
 56. 岩坪岡田島遺跡、57. 五十里西遺跡、58. 五十里道重遺跡、59. 須田藤の木遺跡

3. 遺跡の分布状態

地形的概観

頭川城ヶ平横穴墓群周辺を地形から概観すると、良質な石灰質砂岩や泥岩で構成される丘陵（西山丘陵）・その丘陵に囲まれ北西及び西方向に分岐して伸びる谷（頭川谷）・丘陵の裾から小矢部川に挟まれる平野（射水平野）に区分できる。

丘陵地の遺跡

丘陵地には、尾根上に弥生時代の墳丘墓群から古墳時代後期の古墳群が数多く分布し、さらに斜面上に横穴墓群が点在している。いずれも谷の浸食により形成された舌状台地の先端部に集中する傾向が見られる。古墳群は、本遺跡から南西方向に位置する江道横穴墓群まで直線距離約2.2km程の間に現在確認されているだけで安房山古墳群・四十九古墳群・倉谷古墳群・遺ヶ谷Ⅰ～Ⅲ古墳群・立山古墳群・男撰古墳群・釈迦堂古墳群・笹八口谷内古墳群の10古墳群が尾根上先端部にひしめいている。

横穴墓群は、後期古墳群に付随するかのようには遺存しており、良質な石灰質砂岩層もしくは泥岩層が堆積する斜面を選出して穿たれている。小矢部川左岸城の西山丘陵には既述の頭川城ヶ平横穴墓群・江道横穴墓群の2群がある。さらに南西方向へ続く小矢部市・福岡町の丘陵には、福岡町城ヶ平横穴墓群をはじめ、7つの横穴墓群が展開する。一方西山丘陵の北東方向には海老坂の断層崖を介して二上丘陵となり、ここ南麓には二上横穴墓群と院内東横穴墓が位置している。

谷部の遺跡

谷部分には、縄文時代から中世にかけて幅広く遺跡が広がっている。頭川谷は、本遺跡付近で北西と西へ枝分かれするが、この分岐点から西側へ伸びる谷の入り口付近に滝ヶ谷内Ⅰ遺跡が立地する。滝ヶ谷内Ⅰ遺跡では、縄文時代晩期中葉に相当すると思われる条痕文を施した土器や細かい縄文で口縁に裝飾突起をもつ土器片の散布など貴重な資料が得られている。その他、土師器・須恵器・珠洲焼も確認されており、縄文時代～古代・中世に亘る複合遺跡として認識されている。また、射水平野から頭川谷へ入るちょうど入り口付近には、間尺遺跡が立地している。採集により布目瓦が確認されたことにより付近に瓦の供給先、もしくは瓦窯跡の存在が想定されたことや、「梗令分」と書かれた墨書土器の出土により荘園との関連性が示唆されるなど注目を集めている。近年においては、部分的に調査が行われており、徐々にその性格が解明されつつあるのが現状である。

平野部の遺跡

小矢部川左岸の平野部にも数多くの遺跡が点在している。小矢部川の豊富な水量や西山丘陵からもたらされる自然の恵みを考慮すると、人々が生活の場としてこちら一帯を選択してきたことは当然というべきであろう。しかし、蛇行する小矢部川は、幾度も氾濫を起こしているため、生活の場は、微高地もしくは丘陵の裾部分に限定されていたようである。周辺遺跡では、財団法人富山県文化振興財団により調査された手洗野赤浦遺跡（平成11年度調査）・岩坪岡田島遺跡（平成12年度調査）や頭川谷から連続して平野部まで及ぶ先述の間尺遺跡、その他、笹八口遺跡・宮田遺跡・高辻遺跡・月野谷遺跡など弥生時代から中世に営まれた遺跡が密集している。なお、主要地方道高岡氷見線が走る頭川谷から平野の間は、古代の郡境推定地とされており、ここより南西側が山形波郡、北東側を旧射水郡とされている。この境界周辺は、現在3箇所で開催されている東大寺領荘園須加莊比定地の1つを担っている。

第2節 調査概観

1. 既往の調査

昭和57年度の調査

昭和57年8月6日、日本海頭川鉾山山産土の土砂採取中に横穴墓の玄室南東部が掘削のため崩れ、人骨や遺物が出土した。連絡を受けた高岡市教育委員会は、富山県教育委員会、及び土地所有者、鉾区権者、土砂採掘権者と協議し、工事を中断し埋蔵文化財調査を実施することになった。調査は遺跡発見の契機となり、一部破壊された横穴墓（第4号墓）の発掘調査と周囲の試掘調査を実施したものである。高岡市教育委員会が調査主体で富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受けた。調査期間は昭和57年8月19日から同年9月16日までで、調査対象面積は1,500㎡である。

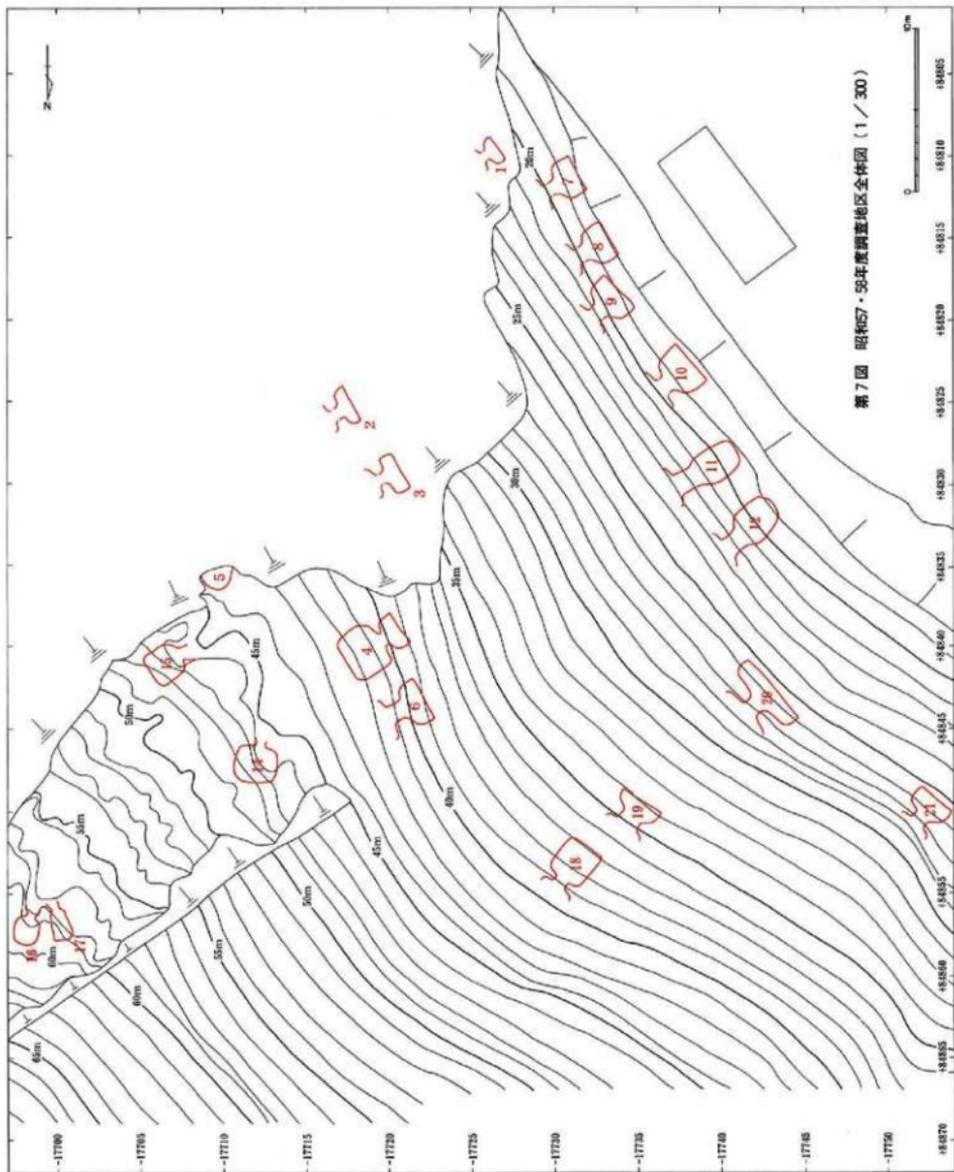
調査の結果、得られた所見は次のとおりである。

1. 頭川城ヶ平横穴墓群は、頭川左岸に面した丘陵斜面に位置する15基（3基消滅）以上のから成る横穴墓群である。
2. 横穴墓は、2基を1単位として斜面の上・中・下段の3段に分布する状況が窺える。10～15mの比高差を保ちながら上段に4基・中段に4基（2基消滅）・下段に7基（1基消滅）が配置され、さらに北西側山腹へその数を増していくことが予想される。
3. 第4号墓の調査では、玄室内から老年男性1体・壮年女性1体・5～6才の子供1体・かたづけを受けている青年男性2体の計5体が確認された。また、副葬品として、須恵器長頸壺1・鉄刀3・刀子4と金具11個が検出され、7世紀後半に位置づけられる。
4. 現存する12基は、第5号墓で天井の落盤がみられるもの、盗掘・掘乱を受けておらず良好な遺存状況を示している。県下に現存する横穴墓群の中でも極めて保存状況が良いと思われる。
5. 小矢部川左岸の高岡市・福岡町・小矢部市に至る丘陵上に立地する後期古墳群と横穴墓群の位置関係が混在または近接している事実が確認されており、それぞれの時期や被葬者の性格の違いを考慮するための足がかりとなる。これは、地域集団の解明・古墳群のあり方・変遷を示すと考えられる。

昭和58年度の調査

昭和57年度の第1次調査に続く第2次調査である。第1次調査の結果、必要と判断された地区において本調査と試掘調査を実施した。第1次調査の上部は、背面が土砂採取により削り取られ、南東側も急斜面となっており、崩壊の危険が高い所であるためこの地区の本調査を計画した。また第1次調査地区の北西側一帯にも横穴墓が広がっていることが予想されたためこの地区の試掘調査も計画した。高岡市教育委員会が調査主体で富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受けた。調査期間は昭和58年7月4日から同年12月16日までである。調査対象面積は6,500㎡で、発掘面積は840㎡である。内訳は、本調査対象面積が500㎡、本調査発掘面積が330㎡、試掘調査対象面積が6,000㎡、試掘調査発掘面積が510㎡となる。

本調査地区では、前年の調査で標高約60m付近より須恵器平瓶が出土したことから、第15号墓より高所にも横穴墓の存在が懸念された。そのため上部より排土作業を行ったところ新たに第16・17号墓が確認された。これを受け本調査は当初予定していた第5・14・15号墓に加え、第16・17号墓の調査も行うことになった。結果として、調査した5基の横穴墓全ての天井部は落盤していたが、人骨及び副葬品の遺存状況は良好



第7图 昭和57・59年度調査地区全体図(1/300)

であった。合計26体分の人骨と須恵器杯身・杯蓋・平瓶・刀子・獣骨などの副葬品が出土し、その他、木棺の残存と想定される板状の木質と釘が大量に遺存していた。

試掘調査地区では、予想された横穴墓群の広がりを確認するため、標高約80mまで適宜19本のトレンチを設けた。結果的に標高約25m付近より第20・21号墓、約34m付近より第19号墓、約37m付近より第18号墓の存在を確認した。なお、第21号墓より北西斜面において横穴の確認はできず、標高80m以上は砂層のみとなっており横穴墓を穿てるような地質ではなかった。確認された横穴墓の中で特徴的であった第20号墓の一部は、幅約1.6mのアーチ形を呈する羨門部分と幅約3.5mの前庭部分と推定され、同横穴墓群最大規模の横穴墓である。

昭和58年度の第2次調査により、本調査地区で2基、試掘調査地区で4基の横穴墓が確認された。一方第1次調査により確認した15基の横穴墓の内1基（第13号墓）が誤認であることが判明した。このため、当横穴墓群は20基（第1～12・14～21号墓）になる。この内、3基（第1～3号墓）は土取工事のため消滅し、6基（第4・5・14・15・16・17）が本調査を実施し、残り11基が現状保存されたことになる。

調査の結果、得られた所見は次のとおりである。

1. 頭川城ヶ平横穴墓群は、頭川川左岸に而した丘陵斜面に位置する20基（3基以上消滅）以上で構成される横穴墓群で、現在の頭川村落の入り口を北限とする範囲に分布する。
2. 横穴墓群は、標高約18m～58mの間に構築されており、4段に分かれ群を成す。標高約18m～26mに始まる第1段に9基（1基消滅）、第2段に6基（2基消滅）、第3段に3基、第4段に2基が比高差をもって位置し、2基1単位として造墓される特徴が窺える。
3. 標高約43mに位置する第5号墓は、南西方向に開口し、玄室床面は隅丸台形でドーム型を呈する。3体の人骨が埋葬されているが、副葬品の有無は不明。7世紀前半の所産と推定する。
4. 標高約46mに位置する第15号墓は、南西方向に開口し、玄室床面は台形でアーチ型を呈する。2体の人骨が埋葬され、副葬品として須恵器杯身3・杯蓋3・平瓶1・刀子1点が納められている。また、木質の付着した釘51本が検出された。7世紀中頃の所産と推定される。
5. 標高約46mに位置する第14号墓は、南南西方向に開口し、玄室床面は隅丸台形でドーム型を呈する。当横穴墓群の中では大型で、14体の人骨が埋葬される。副葬品はないが、木質が板状に確認され、さらに、木質が付着する釘7本が検出された。7世紀前半の所産と想定される。
6. 標高約58mに位置する第16号墓は、南西方向に開口し、玄室床面は台形でアーチ型を呈する。第17号墓と前庭部を共有する。4体の人骨が埋葬され、副葬品として須恵器平瓶1点が納められている。7世紀中頃の所産と推定される。
7. 標高約58mに位置する第17号墓は、西南西方向に開口し、玄室床面は長台形で縦長形を呈する。3体の人骨とともに獣骨1体が埋葬されている。副葬品として刀子1点が納められている。7世紀後半の所産と推定される。
8. 昭和58年度の調査で新たに確認された第18号～21号墓の4基と昭和57年度の調査で確認された第6号～12号墓の7基を加えた計11基は、原状を保持している。盗掘・掘乱を受けておらず良好な遺存状況を示していることから、県下に現存する横穴墓群の中でも、極めて保存状況が良いと考えられる。
9. 小矢部川左岸の小矢部市から高岡市に至る西川丘陵帯には、後期古墳群と横穴墓群が近接して発見される。それらは、古墳群を造りだす社会とその変化を反映していると考えられ、成立時期や被葬者の性格を考慮する糸口となる。

2. 調査に至る経緯

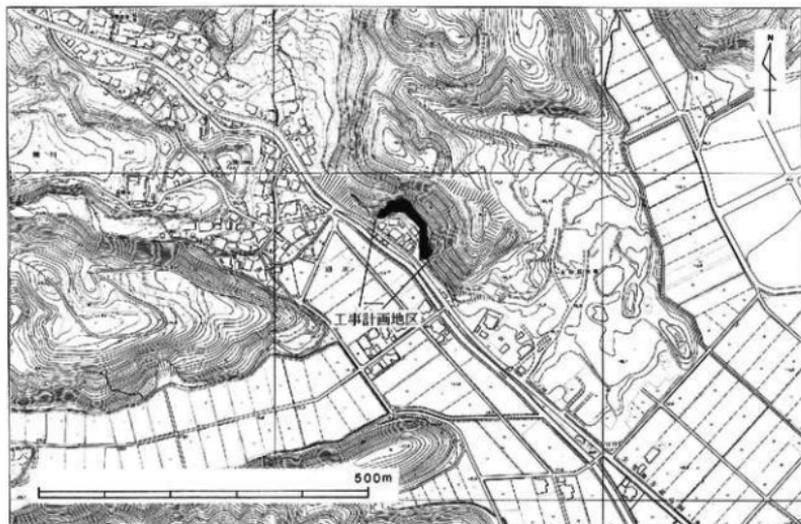
工事計画

頭川谷は南東方向に開口する開析谷である。この谷部を小矢部川の支流頭川が流れ、これに沿うように主要地方道高岡水見線が走っている。この谷が平野部に出る手前、300～400mの左岸側に当「頭川城ヶ平横穴墓群」が所在している。この横穴墓群の範囲については、昭和57・58年度の調査により一応は確定しているものであった。

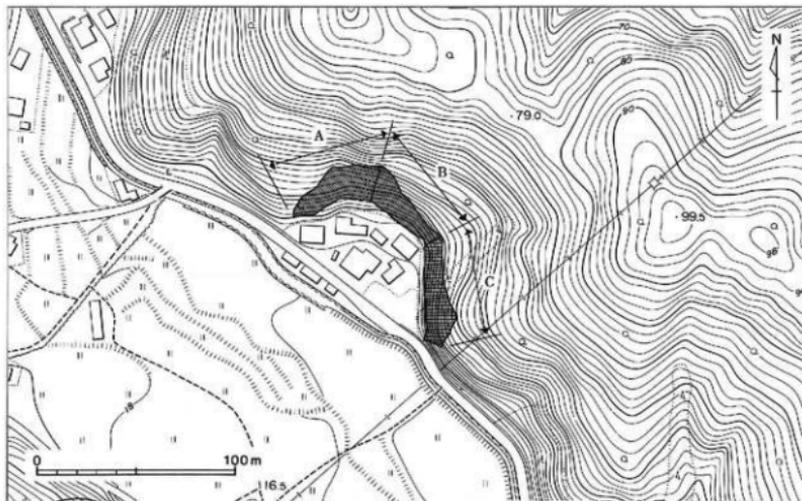
開発工事との関連では、高岡水見線の道路拡幅計画が横穴墓群の一部にかかることがあり、昭和63年度以来、幾度も協議の席に上がることがあった。

当時確認されていた横穴墓群より約100谷奥側に入った所は、頭川左岸の丘陵部を挟る形で平坦地があり、ここに人家が数軒密集している集落である。丘陵が人家に迫り、斜面勾配が急であるため、雪崩発生の危険にさらされている所である。このため、住民の生命財産の保全を目的とし、雪崩対策施設の工事が施工されることになった。この工事は、事業主体が富山県で、担当が富山県高岡土木事務所である「頭川地区雪崩対策事業」である。

施工期間は平成8年度から4年間の計画で、整備内容は、雪崩防護柵を長さ113m、高さ6.4m設置するものである。工事地区は、集落を取り囲むように、北西側・北東側・南西側に区分され、各年度ごとに工区を区切って実施される予定であった。



第8図 工事区域位置図(1/7,500)



第9図 工事区域区分図(1/2,500)

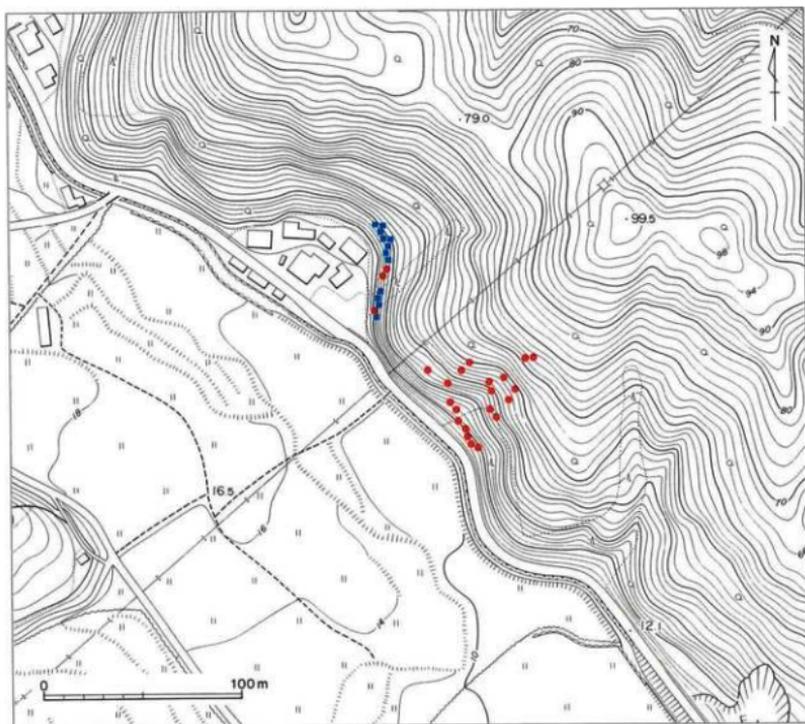
A-北西側工区、B-北東側工区(平成10年度調査地区)、C-南東側工区(平成11・12年度調査地区)

平成8年7月、工事に先立ち、高岡土木事務所と高岡市教育委員会文化財課の各担当者が現地確認を行った。この時はこの工事地区まで横穴墓群が広がっている可能性は少ないとの認識のもと、慎重に工事することと、工事中で遺跡等が発見された場合の連絡などの申し入れを行ったに止まった。

新たな横穴の確認

雪崩対策事業の本格的な工事は平成9年度から始まった。平成9年度の工区は北西側地区であり、平成10年度の工区は北東側地区であった。平成10年度の工事の掘削は8月6日～8日に行われた(1次掘削)。その後2次掘削が10月9日～10月14日に行われ、工事関係者がこの時点で横穴の存在に気づき、工事はその後若干行われ、区切のよい時点で一旦終了となった。県高岡土木事務所から市文化財課へ連絡が入ったのは10月26日であった。翌27日に市文化財課の担当者が現地を確認し、さらに28日に県高岡土木事務所・市文化財課の2者に、富山県埋蔵文化財センターに加わっていただき、現地で協議を行った。

横穴は6基あり、ほぼ同一の高さで横に配置され南西方向に開口しているものであった。当地や周辺地区は、横穴を穿つに良好な土質を有することと相俟って、横穴に芋・菊・薪等を貯蔵したり、養蚕の施設として利用した横穴が多く存在する。これらは穴倉とも呼ばれている。古代の横穴墓の立地と類似している。今回発見の横穴は、これらの近代のものと考えられるものであったが、古代の横穴墓を再利用したり改変する可能性があることや、古代の横穴墓の名残りと見られる部分もあった。一方で入口側が数m工事により掘削を受けている状態であった。そこで、本格的な発掘調査をする程のものではなく、記録(図面・写真)作成をすることに至った。



第10図 横穴墓・横穴分布図（1／2,500）

赤の円形-古代の横穴墓、青の方形-その他の横穴

試掘調査の実施

平成11年度の工区は南東側地区である。県高岡土木事務所と協議をし、現地確認や試掘調査の手順を踏まえることにした。平成11年4月27日に現地踏査を行い、横穴を6基確認した。そこで試掘調査の実施を計画した。試掘調査は、平成11年8月2日～10月29日の間に行った。試掘坑は14箇所設定し、204㎡の発掘を行った。岩盤層（頭川層：石灰質砂岩）まで掘り下げた結果、横穴を9基確認した。これは4月27日に確認した6基に新たに3基加わったものである。内訳は古代の横穴墓と想定されるもの4基、近代の貯蔵穴と想定されるもの4基、不明確なもの1基である。

このような経緯で、平成11年度予定の主要な工事は平成12年度に延期してもらい、当該地の発掘調査（本調査）を平成12年度に実施するに至った。なお、平成12年度の調査をできるだけすみやかにするため、平成11年度の末（平成12年3月）に安全対策などの調査作業の一部を実施した。

3. 調査の概要

平成10年度の確認調査

平成10年度の調査は、北東側工区で工事中に確認された横穴の記録作成を主要なものとする調査である。横穴の位置は、平成10年度工事地区の北東側工区でも、南東寄りの所である。ここから6基の横穴が確認された。近代の貯蔵穴と判断される内容であるが、一部横穴墓等、古い時代の横穴を再利用した部分も確認された。調査面積は厳密にすることができないが、一応50㎡としておく。

平成11年度の試掘調査

平成11年度の調査は、南東側工区である。現地踏査により横穴を確認したことを受けて、試掘調査を実施した。古代の横穴墓や近代の貯蔵穴等の横穴を検出した。

平成12年度の調査方法

調査は、前年度の試掘結果をもとに行い、遺構の確認及検出に努めた。調査地区は、急傾斜地で作業に危険性を伴うことから安全対策は人念に行うこととした。また、重機での表土除去は、遺構の破壊を誘発する恐れがあることから、遺構確認・検出作業は全て人力で行った。

前年度の試掘調査で確認された遺構全9基のうち、古代の横穴墓と認識されたのは4基で、その他は近代の貯蔵穴と判断した。しかし、貯蔵穴と判断された遺構も横穴墓を改変して再利用している例が近隣遺跡で確認されていることから、今回の調査では全ての遺構を調査対象とした。

検出作業は、横穴墓ないし横穴を主軸に合わせて10分割し、随時土層を記録・観察しながら慎重に掘り下げることを基本とし、なお、遺構内の堆積土に関しては、全てふるいに通し遺物の有無を確認した。

この調査は試掘調査で確認された遺構の掘り下げと、周辺部の発掘を基本とするものである。発掘面積は約260㎡である。

平成12年度の本調査

平成12年度の調査は、南東側工区である。平成11年度の試掘調査対象地区の本調査である。調査の結果、横穴墓3基、その他の横穴6基となった。後者は、近代の貯蔵穴4基、近代の地下水の取入口1基、性格不明横穴1基である。出土遺物は土師器片1点のみである。

検出遺構

平成10～12年度の調査で検出した遺構は、全体として以下の通りである。

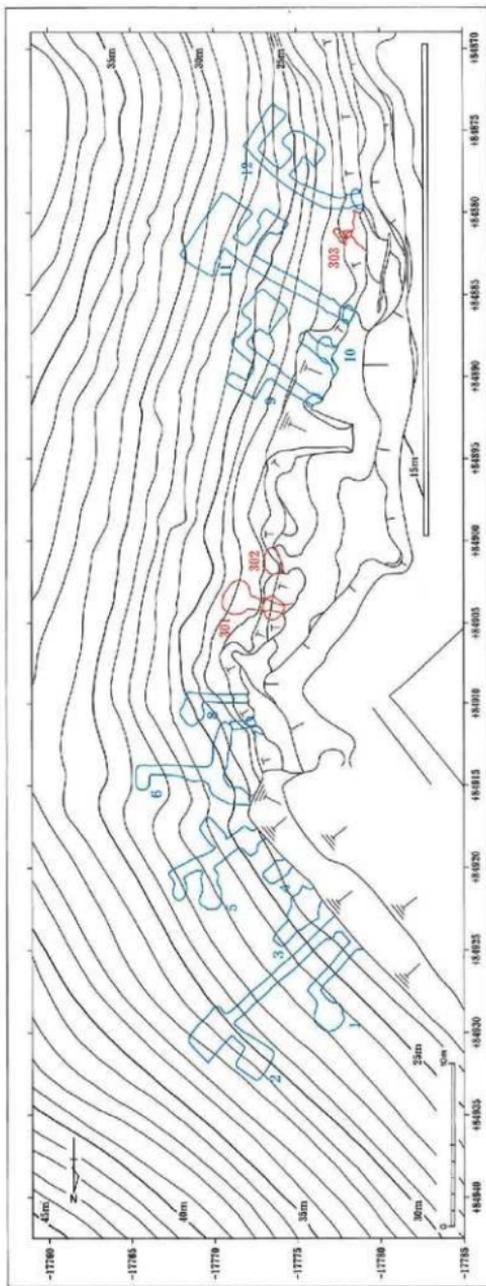
横穴墓3基：第1～3号墓（SZ301～303）

その他の横穴12基 { 近代の貯蔵穴：第1～6・9～12号横穴（SX01～06・09～12）
近代の地下水の取入口：第8号横穴（SX08）
性格不明の横穴：第7号横穴（SX07）

資料整理

昭和57・58年度の調査で確認された横穴墓との位置関係を明確にする必要があるため、当該地の再測量を行い、以前報告した図面を公共座標を基準としたものに当てはめた。本書には修正も兼ねてこの図を掲載している。また等高線の水準値も、修正し海拔を基準とするものとした。

横穴墓の名称（号数）については、昭和57・58年度の調査で、第1号墓から第21号墓（第13号墓は欠番）まで命名されている。今回検出にかかるものについては、昭和57・58年度調査地区との間には間隙があることと、この調査のものと区別するためあり、一連番号とはせず3ケタの仮番号のものとした。



第11圖 平成10~12年度調査地区全体図 (1 / 300)

第2章 遺構

第1節 横穴墓

第301号墓 (SZ301) [図面16・17、図版6-1・7-1・20・21・22]

古代の横穴墓と考えられる。墓前域及び羨道部の一部は崩落していたため、羨道と玄室の検出に留まったが、遺存状態は極めて良好である。玄室の床面はやや左袖側が膨らむ楕円形状を示し、天井はドーム型を呈している。しかし、近代に貯蔵穴として改変を受けている様子も窺え、玄室床面は、羨道部の床面と比較すると約0.2m標高を減じている。なお、その他、羨門・玄門にあたる部分には、構築時期不明の小ピットが両端に備わる特徴が見られる。工具痕は、玄室内で2種類確認されており、壁及び天井は、約5cm幅の工具で、床面は、約2cm幅の工具を使用して削られている状況が窺えた。

標高約18mに位置し、第302号墓の北3mに石灰質砂岩を穿って構築されている。主軸は北-103度-東を向き、西北西方向へ開口するものである。規模は、玄室床面長軸2.2m・短軸1.5m・高さ1.8m、羨道部長さ1.0m・幅0.7m・高さ1.3mを測る。

遺物は、近現代に詰め込まれたゴミと明治期の半銭とともに出土した獣骨の一部のみで、横穴墓が構築された時期に相当する土器類等は出土しなかった。

第302号墓 (SZ302) [図面18・19、図版6-1・7-2・20・23・24]

古代の横穴墓と考えられる。木根の発達により付近はかなり荒れていたため、玄室・羨道・墓前域の大部分は崩落している状態である。不明瞭な部分が多いが、遺存部分から想定すると玄室の床面はやや左袖側が膨らむ楕円形状を示し、天井はドーム形を呈している。近現代には、物置的な役割を果たしていたらしく確認時には、大量のゴミが投げ込まれていた。工具痕は、玄室内の壁及び天井で確認されており、約5cm幅の工具を使用して削られている。

標高約18mに位置し、第301号墓の南3mに石灰質砂岩を穿って構築されている。主軸は推定北-93度-東を向き、西方向へ開口するものである。規模は、想定で玄室床面長軸1.6m・短軸1.4m・高さ約1.4mを測る。崩落の度合いが、玄室のほぼ中央あたりから激しくなるため、羨道部・墓前域の規模を正確に計測するにはいたらなかった。

横穴墓の構築された時代に相当する遺物は確認できなかった。墓前域南西付近の表土直下からは、獣骨が良好な状態で出土しているが、ビニール製の首輪がともに確認されていることから、近現代に埋葬されたものと判断される。

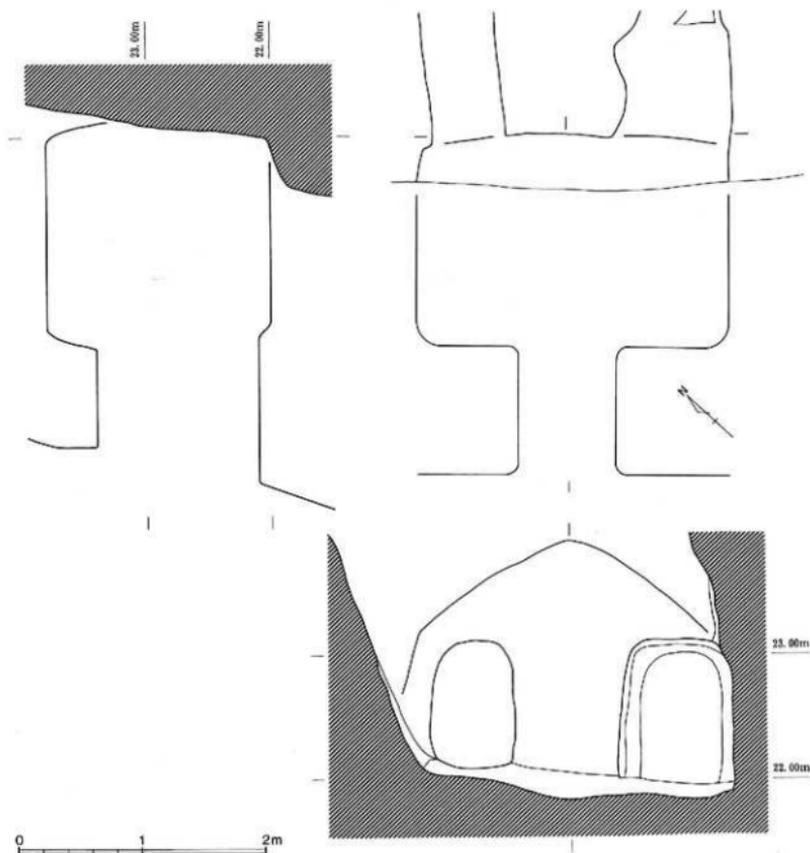
第303号墓 (SZ303) [図面20・21、図版6-2・25・26]

小型横穴墓の可能性が考えられる。遺存状態は良好で、玄室・羨道・墓前域の全てが、原型をほぼ留めている。玄室の床面はやや左袖側が膨らむ楕円形状を示し、天井はドーム形を呈している。本横穴墓も第301号墓と同様で、玄室と羨道の同床面に比高差を持ち、玄室のほうが約0.2m標高を減じている。また、羨道部と墓前域の間にも段差が生じており、墓前域が約0.5m低くなっている。なお、段の落ちきった部分には、

境を成すかのように浅い溝が南北方向に走る。全体的に観察すると、支室・羨道部は、ちょうど横瓶のような形状で掘り込まれており、墓前域は、平坦にカットされている状況が窺える。工具痕は、風化が激しいためか確認することはできなかった。

標高18.5mに位置し、石灰質砂岩を穿って構築されている。主軸は北-68度-東を向き、南西方向へ開口するものである。規模は、支室床面長軸1.1m・短軸0.4m・高さ0.9m、羨道部全長0.4m・幅0.3m・高さ0.8mを測る。羨道部分と平坦部分の間に認められている溝は、幅約0.25mで羨門の痕跡を想像させる。

遺物・人骨の出土は認められない。



第12図 第1・2号横穴入口部実測図(1/40)

第2節 その他の横穴

第1号横穴と第2号横穴の平坦面〔第12図、図版27〕

第1号横穴と第2号横穴は、工事により掘削を受けているため、入口付近の構造が不明となっている。しかし、両横穴の入口付近を観察したところ僅かながら横穴墓の名残と思われる平坦面が確認できた。幅約2.4m・奥行約0.2mを計り、玄室奥壁の床面付近と推定できる内容となっている。奥壁側の幅2.4mはやや大型の横穴墓とした場合、妥当な規模である。また奥壁が玄室内へ傾斜をもって立ち上がる形状と推定した場合、最も奥側の床面付近が残存したと考えられる。後世になり、両横穴墓を利用し、奥壁の両脇に穴を穿ち、さらに奥壁へ掘り進め貯蔵穴としたものとの推定も可能である。

第1号横穴（SX01）〔図面22、図版28-1〕

近代における穀物等の貯蔵穴と判断する。入口付近を第2号横穴と合わせて正面から観察すると、横穴墓の奥壁部分を想定させる、かまほこ状の浅い掘り込みが認識できる。なお、入口前部分は第2号横穴の入口前部と平坦面でつながっている。横穴自体は、全長約4.3m・幅約0.6m・高さ約1.1mの通路部分と貯蔵庫1基から構成される。遺物の出土は見られなかった。

第2号横穴（SX02）〔図面22、図版28-2〕

近代における穀物等の貯蔵庫と判断する。入口付近を第1号横穴と合わせて正面から観察すると、横穴墓の奥壁部分を想定させる、かまほこ状の浅い掘り込みが認識できる。なお、入口前部分は第1号横穴の入口前部と平坦面でつながっている。横穴自体は、全長約9.0m・幅約0.6m・高さ約1.1mの通路部分と貯蔵庫2基から構成される。遺物の出土は見られなかった。

第3号横穴（SX03）〔図面23、図版28-3〕

近代における穀物等の貯蔵穴のために構築された横穴としたものである。横穴墓を改変した痕跡がないことや工具痕が、近隣の芋穴に刻まれている痕跡と類似することから、近代の所産とするのが妥当と判断する。横穴自体は、現存全長約0.4m・幅約0.8~2.1m・高さ約0.9mの北東方向へ向かう通路部分のみである。他の横穴と比較して、通路の奥行は短く、整形が不十分であるため、製作段階において作業を中止した可能性が考慮できる。遺物の出土は見られなかった。

第4号横穴（SX04）〔図面24、図版29-1〕

近代における穀物等の貯蔵穴のために構築された横穴としたものである。横穴墓を改変した痕跡がないことや工具痕が、近隣の芋穴に刻まれている痕跡と類似することから、近代の所産とするのが妥当と判断する。横穴自体は、現存全長約1.8m・幅約0.7~1.1m・高さ約0.9mの北東方向へ向かう通路部分のみである。また、貯蔵庫を持たないことから、製作段階において作業を放棄した可能性が考慮できる。遺物の出土は見られなかった。

第5号横穴（SX05）〔図面23、図版29-2〕

近代における穀物等の貯蔵穴のために構築された横穴としたものである。横穴墓を改変した痕跡がないことや工具痕が、近隣の芋穴に刻まれている痕跡と類似することから、近代の所産とするのが妥当と判断する。横穴自体は、現存全長約0.6m・幅約0.6m・高さ約1.0mの通路部分とそれに付随する貯蔵庫3基から構成される。各貯蔵庫の床面には穀物の粉殻等が敷いてあり、近年まで使用されていた痕跡が窺える。遺物の出土は見られなかった。

第6号横穴 (SX06) [図面24、図版29-3]

近代における穀物等の貯蔵穴のために構築された横穴としたものである。横穴墓を改変した痕跡がないことや工具痕が、近隣の芋穴に刻まれている痕跡と類似することから、近代の所産とするのが妥当と判断する。横穴自体は、L字状の掘り込みが2本組み合わさった通路部分のみで構成されており、貯蔵庫の付随は見られない。両通路とも、幅約0.5~1.0m・高さ約1.1mを保ちながら穿たれている。道の床面には穀物の粉塵等が敷いてあり、近年まで使用されていた痕跡が窺える。遺物の出土は見られなかった。

第7号横穴 (SX07) [図面25、図版30-1]

長方形の小さな掘り込みで性格は不明である。工具痕は幅約2~3cmと精巧で、横穴墓で使用されている幅広の工具痕とは様相が異なる。規模は、全長約1.4m・幅約0.5m・高さ約1.1mと小型であるが、横穴墓の形状とは異質であり、古代の遺構として考慮するのは困難である。むしろ中世墓と形状は類似しているといえる。遺物の出土は見られなかった。

第8号横穴 (SX08) [図面25、図版30-2]

近代に利用されたと思われる地下水の取水口及び貯蔵穴と思われる。工具痕が、近隣の芋穴に刻まれている痕跡と類似することから近代の所産とするのが妥当と判断する。横穴自体は、全長約3.7m・幅約0.5m・高さ約0.9mの通路部分に山水を貯える箱型の貯水槽と貯蔵庫が付随する構造となっている。開口部をくぐるとすぐに約0.3m程床面が落ち込み、常時この落ち込みには山水が溜っている。西方向に道が折れ、貯蔵庫へと通じる。遺物の出土はみられなかった。

第9号横穴 (SX09) [図面26、図版30-3]

近代における穀物等の貯蔵穴のために構築された横穴としたものである。横穴墓を改変した痕跡がないことや工具痕が、近隣の芋穴に刻まれている痕跡と類似することから、近代の所産とするのが妥当と判断する。横穴自体は、全長約6.3m・幅約0.6m・高さ約1.1mの北北東へ向かう通路部分とそれに付随する貯蔵庫2基から構成される。遺物の出土は見られなかった。

第10号横穴 (SX10) [図面26、図版31-1]

近代における穀物等の貯蔵穴のために構築された横穴としたものである。崩落が激しく、全貌は明らかではないが、横穴墓を改変した痕跡がないことや工具痕が、近隣の芋穴に刻まれている痕跡と類似することから、近代の所産とするのが妥当と判断する。横穴自体は、全長約2.2m・幅約0.7m・高さ約1.2mの北北東方向へ向かう通路部分のみである。他の横穴と比較して、通路の奥行は短く、整形が不十分であるため、製作段階において作業を中止した可能性が考慮できる。土師器片1点が崩落土中より出土している。

第11号横穴 (SX11) [図面27、図版31-2]

近代における穀物等の貯蔵穴のために構築された横穴としたものである。横穴墓を改変した痕跡がないことや工具痕が、近隣の芋穴に刻まれている痕跡と類似することから、近代の所産とするのが妥当と判断する。横穴自体は、全長約8.6m・幅約0.8m・高さ約1.5mの北北東へ向かう通路部分とそれに付随する貯蔵庫2基から構成される。遺物の出土は見られなかった。

第12号横穴 (SX12) [図面28、図版31-3]

近代における穀物等の貯蔵穴のために構築された横穴としたものである。横穴墓を改変した痕跡がないことや工具痕が、近隣の芋穴に刻まれている痕跡と類似することから、近代の所産とするのが妥当と判断する。横穴自体は、南西方向にカーブを描く幅約0.7m・高さ約1.1mの比較的長い通路部分とそれに付随する貯蔵庫2基から構成される。遺物の出土は見られなかった。

第3章 結 語

1. 今回の調査

横穴墓と横穴

今回の調査では、近代の貯蔵穴も含め合計15基の横穴を調査した。この結果、古代の横穴墓3基・その他の横穴12基（近代の貯蔵穴・近代の地下水の取入口・性格不明横穴）を検出した。古代の横穴墓は、第301～303号墓、その他の横穴は、第1～12号横穴である。いずれも標高17m～20m程に築かれており、そのほかの標高では、検出されていないのが特徴である。

貯蔵穴の調査では、横穴墓を改変して活用されている可能性を示唆されていたため、土層・遺物の有無・構造等に留意して掘り進めていった。しかし、第1・2号横穴を除けば、いずれも再利用している痕跡をつかむには至らなかった。貯蔵穴に詰め込まれていたものを観察したところ、ごく近年まで使用されていたことが窺えた。

横穴墓は、現在ゴミ穴として利用されていたが、近代に貯蔵穴として造られた横穴とは明らかに形状の違いが認められた。また、工具痕も近代の横穴はニードル状の態を使用しているのに対し、横穴墓は幅広いの平鑿を使用していた。

古代の横穴墓以外の横穴を「その他の横穴」としてきたが、性格としては、地下水の取入口と性格不明と

No	名 称	標 高	通路全長	通路幅	通路高さ	貯蔵庫数	主 軸 方 向	備 考
01	第1号横穴	22.0m	4.3m	0.6m	1.1m	1基	北-48度-東	
02	第2号横穴	22.0m	9.0m	0.6m	1.1m	2基	北-47度-東	
03	第3号横穴	21.5m	(0.4m)	0.9m	0.9m	-	北-47度-東	整形不十分
04	第4号横穴	21.5m	(1.8m)	1.0m	0.9m	-	北-51度-東	整形不十分
05	第5号横穴	21.5m	(0.6m)	0.6m	1.0m	3基	北-46度-東	
06	第6号横穴	21.0m	-	1.0m	1.1m	-	北-108度-東	2本のL字状通路
07	第7号横穴	20.0m	1.4m	0.5m	1.1m	-	北-80度-東	性格不明遺構
08	第8号横穴	19.5m	3.7m	0.5m	0.9m	1基	北-91度-東	地下水の取入口
09	第9号横穴	17.5m	6.3m	0.6m	1.1m	2基	北-124度-東	
10	第10号横穴	17.5m	2.2m	0.7m	1.2m	-	北-125度-東	整形不十分
11	第11号横穴	18.0m	8.6m	0.8m	1.5m	2基	北-120度-東	
12	第12号横穴	16.5m	...	0.7m	1.1m	2基	北-79度-東	南西方向にカーブ

第1表 その他の横穴計測値一覧表

したもの以外は、貯蔵穴として利用されてきたものである。これら「その他の横穴」の計測値を第1表として示した。

今回の横穴墓

今回調査した横穴墓は、301号墓、302号墓、303号墓の3基である。これらについては以下の通りである。

第301号墓は3基の横穴墓の中でも遺存状態が非常に良好であった。遺物の出土は見られなかったものの、形状は横穴墓そのものであり工具痕も近代の横穴とは全く異なる工具を使用していることから古代の横穴墓と断定した。

第302号墓は、木根の発達によりそのほとんどが崩壊していた。玄室の2分の1程度しか遺存していなかったことや、遺物の出土が見られなかったことから、横穴墓と完全に断定するのは困難であった。しかし、第301号墓と類似した幅広の工具痕が確認されていることから、横穴墓と判断した。

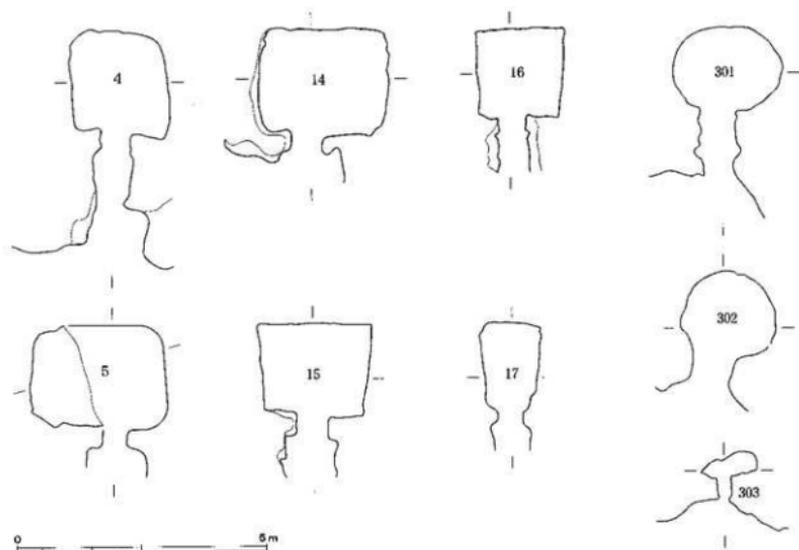
第303号墓は、横穴墓と類似した形状を有するが、非常に小型であった。頭川城ヶ平横穴墓群のこれまでの調査では、小型横穴墓は確認されていないため、不明な点が多い。だが、全国的に見ると類例は存在しているため、横穴墓と考えた。なお、遺物の出土は見られない。

2. 横穴墓の構造

当横穴墓群は、昭和57・58年度の調査で第1～12・第14～21号墓の20基の横穴墓が確認された。今回3基が確認されたことにより、23基の横穴墓で構成されていることになる。昭和57・58年度に発掘調査されたものは、第4・5・14・15・16・17号墓の6基である。そして今回、第301～303号墓の3基を発掘調査した。これらの9基が形態等、横穴墓の内容を具体的に知ることができるものである。これらについては、第2表と第13図でまとめてみた。

No	名称	標高	玄室長軸	玄室短軸	玄室高さ	羨道長さ	羨道幅	羨道高さ	主軸方向
01	第4号墓	39.0m	(1.9m)	1.9m	1.0m	1.0m	0.8m	(0.8m)	北-65度-東
02	第5号墓	43.5m	(2.2m)	-	-	-	-	-	北-65度-東
03	第14号墓	45.5m	2.6m	2.1m	(1.6m)	0.5m	0.9m	-	北-10度-東
04	第15号墓	46.0m	2.1m	1.9m	(1.6m)	1.0m	1.1m	-	北-45度-東
05	第16号墓	58.0m	1.8m	1.6m	-	-	0.6m	-	北-18度-東
06	第17号墓	58.0m	1.8m	1.0m	-	0.6m	0.7m	-	北-9度-西
07	第301号墓	19.0m	2.2m	1.5m	1.8m	1.0m	0.7m	1.3m	北-103度-東
08	第302号墓	19.0m	(1.6m)	(1.4m)	(1.4m)	-	-	-	北-93度-東
09	第303号墓	18.5m	1.1m	0.4m	0.9m	0.4m	0.3m	0.8m	北-68度-東

第2表 横穴墓計測値一覧表



第13図 横穴墓一覧図（1/100）

4・5・14～17：昭和57・58年度調査の横穴墓、301～303：平成11・12年度調査の横穴墓

当横穴墓の構造は、単室構造の玄室に羨道及び墓前域（前庭部）が付設される型式である。小型の303号墓を一応除外すれば、玄室の形態から以下の通り3つに分類できる。

- A類 玄室平面矩形、アーチ天井：第15・16・17号墓。床面の隅部が角張るもの。
- B類 玄室平面隅丸桁形、ドーム天井：第4・5・14号墓。
- C類 玄室平面楕円形、ドーム天井：第301・302号墓。

玄室平面形から型式の変遷を単純に考えれば、角張った床面から円い床面となり、天井部がアーチ形からドーム形への変化と捉えられる。すなわち上記のA類→B類→C類への変遷観となる。しかし他の要素を考慮すれば必ずしもこのようにはならないものと判断される。またアーチ天井は床面が角張ったものと、ドーム天井は床面が隅丸矩形や円形等、丸いものと構築上結び付くものである。立地からは、A類が標高の高い所に、B類は低い所に、C類はこれらとは離れた所に位置している。

玄室の規模は、長軸2.6m、短軸2.1mを計る第14号墓が最大である。玄室の一部のみしか調査していないが、第5号墓がこれに近い規模と推定される。これに長軸2.1m、短軸1.9mを計る第15号墓を加えた3基が大型のものである。これらよりやや小型であるのが、第4・16・301・302号墓である。第17号墓は玄室幅約1mとなり、主軸と直交した形で遺骸を直接埋葬できないものとなっている。第303号墓はさらに小型となり、第2次葬の横穴墓としての使用以外の、通常の埋葬ができない規模である。

No	名称	記号	旧名称等	標高	確認年度	備考
01	第1号墓	SZ01	第1号横穴墓	21.0m	昭和157年度	消滅
02	第2号墓	SZ02	第2号横穴墓	36.0m	昭和57年度	消滅
03	第3号墓	SZ03	第3号横穴墓	35.5m	昭和57年度	消滅
04	第4号墓	SZ04	第4号横穴墓	39.0m	昭和57年度	調査済み
05	第5号墓	SZ05	第5号横穴墓	43.5m	昭和57年度	調査済み
06	第6号墓	SZ06	第6号横穴墓	39.0m	昭和57年度	未調査
07	第7号墓	SZ07	第7号横穴墓	18.0m	昭和57年度	未調査
08	第8号墓	SZ08	第8号横穴墓	18.0m	昭和57年度	未調査
09	第9号墓	SZ09	第9号横穴墓	18.5m	昭和57年度	未調査
10	第10号墓	SZ10	第10号横穴墓	18.0m	昭和57年度	未調査
11	第11号墓	SZ11	第11号横穴墓	19.0m	昭和157年度	未調査
12	第12号墓	SZ12	第12号横穴墓	19.0m	昭和57年度	未調査
13	—	—	第13号横穴墓	45.5m	昭和157年度	誤認により欠番
14	第14号墓	SZ14	第14号横穴墓	45.5m	昭和57年度	調査済み
15	第15号墓	SZ15	第15号横穴墓	46.0m	昭和157年度	調査済み
16	第16号墓	SZ16	第16号横穴墓	58.0m	昭和58年度	調査済み
17	第17号墓	SZ17	第17号横穴墓	58.0m	昭和58年度	調査済み
18	第18号墓	SZ18	第18号横穴墓	37.0m	昭和58年度	未調査
19	第19号墓	SZ19	第19号横穴墓	34.0m	昭和58年度	未調査
20	第20号墓	SZ20	第20号横穴墓	26.0m	昭和58年度	未調査
21	第21号墓	SZ21	第21号横穴墓	25.5m	昭和58年度	未調査
22	第301号墓	SZ301	99-2号横穴	19.0m	平成11年度	調査済み
23	第302号墓	SZ302	99-3号横穴	19.0m	平成11年度	調査済み
24	第303号墓	SZ303	99-13号横穴	18.5m	平成11年度	調査済み・小型横穴墓
25	第1号横穴	SX01	98-1号横穴	22.0m	平成10年度	近代の貯蔵穴
26	第2号横穴	SX02	98-2号横穴	22.0m	平成10年度	近代の貯蔵穴
27	第3号横穴	SX03	98-3号横穴	21.5m	平成10年度	近代の貯蔵穴
28	第4号横穴	SX04	98-4号横穴	21.5m	平成10年度	近代の貯蔵穴
29	第5号横穴	SX05	98-5号横穴	21.5m	平成10年度	近代の貯蔵穴
30	第6号横穴	SX06	98-6号横穴	21.0m	平成10年度	近代の貯蔵穴
31	第7号横穴	SX07	99-11号横穴	20.0m	平成11年度	性格不明横穴、中世墓か？
32	第8号横穴	SX08	99-1号横穴	19.5m	平成11年度	地下水の取入口
33	第9号横穴	SX09	99-4号横穴	17.5m	平成11年度	近代の貯蔵穴
34	第10号横穴	SX10	99-12号横穴	17.5m	平成11年度	近代の貯蔵穴
35	第11号横穴	SX11	99-5号横穴	18.0m	平成11年度	近代の貯蔵穴
36	第12号横穴	SX12	99-6号横穴	16.5m	平成11年度	近代の貯蔵穴

第3表 横穴墓・横穴一覧表

3. 横穴墓の時期

頭川城ヶ平横穴群は副葬品を含めて、遺物の出土量が比較的少ない。このような中で第15墓からは、須恵器坏身3点と坏蓋3点が出土しており、この横穴墓や横穴墓群全体の時期を決定する上での基準となっている。坏身は口径約14cmを計り、底部外面をヘラ切りしている。高台は付かない。坏蓋は口径約15cmを計り、天井部はヘラ削りして、扁平な半球形をつまみが付く。口縁部内面にかえりが付くものが2点、口縁部が短かく下方へ折れるものでかえりが付かないもの1点である。前者のかえりがあるタイプと比較して、全体的な形態差から時期差をみる考えもある。かえりのある坏蓋については、かえりは弱く退化したものである。このタイプのものとしては最も新しいものであり、かえりのない坏蓋との時期差はほとんどなく、消費地においては同時期のものとしてよいものである。出土状態からは分離する必要はないものと考えられる。期的には7世紀後半～8世紀初頭頃の年代観を与えてよいと思われる。県内の横穴墓出土資料としては、新しい時期のものとしては最もまとまったものである。

この第15号墓の資料を横穴墓構築時の副葬品とみれば、この横穴墓は新しい時期のものとなり、横穴墓群全体も比較的新しい一群となる。一方この第15号墓については追葬の事実が指摘されており、この段階の副葬品と理解したい。また第15号墓は比較的高い所に構築されていることから、この横穴墓群の中では古い段階のものとはされていない。

高岡市内には、院内東・二上・頭川城ヶ平・江道の4群の横穴墓群が所在する。院内東・二上が二上山南麓に、頭川城ヶ平・江道が西山丘陵に位置している。二上横穴墓群以外は発掘調査され、具体的内容が判明している。院内東横穴墓は1基のみ確認された横穴墓である。出土した須恵器より7世紀初頭頃の構築と推定される。江道横穴墓群は20基から構成されている。出土した須恵器等より構築の中心時期は7世紀初頭頃と推定される。また7世紀末～8世紀初頭頃の利用も想定される。

頭川城ヶ平横穴墓群については、県下や市内において横穴墓が盛行したとされる6世紀後半から7世紀中葉頃の明確な資料がなく横穴墓の構築時期を特定できないが、他の横穴墓群の資料等も考慮して、7世紀後半頃に追葬等で横穴墓が利用されていたことと、これより古い段階、6世紀末～7世紀中葉頃に構築されたものである可能性を想定しておきたい。

4. 県下の横穴墓

県下の横穴墓の立地

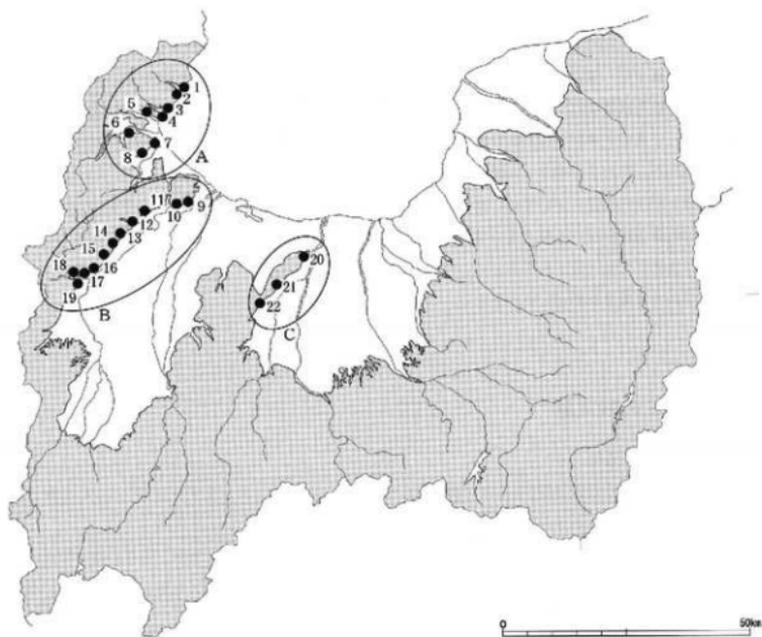
富山県下には現在22群約290基の横穴墓が知られている。これは、大きく3つのグループに分類することができ、以下の通りになる。

- A. 水見臨海地区：脇方、藪田薬師、阿尾瀬戸ヶ谷内、阿尾城山、加納、新保、朝日谷地、坂津。
- B. 小矢部川左岸地区：院内東、二上、頭川城ヶ平、江道、城ヶ平、加茂、鳥倉、田川白土山、田川三角山、田川城ヶ峰、桜町。
- C. 呉羽丘陵地区：番神山、金屋障の穴、新町。

呉羽丘陵より東側からは確認されていないことと、主要な分布が、水見市から高岡市・福岡町を経て小矢部市へ至る丘陵に分布していることが言える。

埋葬形態

埋葬形態を知るには、埋葬主体である人骨の遺存状態が決め手となる。わが国の土壌は酸性のものが多く人骨の遺存状態は極めて悪い。このなかで、氷見臨海地区や小矢部川左岸の西山丘陵はアルカリ性土壌のため、人骨の遺存状態がよいものである。発掘調査され埋葬状態が比較的良好に判明するものとして、氷見市の脇方横穴墓群、高岡市の頭川城ヶ平横穴墓群・江道横穴墓群がある。多人数の埋葬例として、脇方第4号墓の8個体、同第8号墓の9個体、頭川城ヶ平第14号墓の14個体、江道第2号墓の13個体、同第22号墓の14個体、同第23号墓の15個体、同第24号墓の13個体がある。追葬の例として、頭川城ヶ平第5号墓、同第15号墓があり、かたづけの例として、頭川城ヶ平第16号墓があり、同第14号墓の場合もかたづけの結果である。脇方第8号墓は追葬、かたづけと理解されている。頭川城ヶ平第5・15号墓は仰臥伸展葬の状態で遺骸が置かれたとされている。一般的には、仰臥伸展葬による埋葬、そして追葬のためのかたづけが行われる。その結果最終的な埋葬は仰臥伸展葬となり、それ以前のはかたづけなどにより、動かされたと理解されている。一方、江道第23号墓は、改葬を示す良好な事例である。木棺に納められたと推定される状態で5個体分が確認された。仰臥伸展葬の形を取らず、明らかに2次的に配置された形態を示している。県下における、



第14図 県下の横穴墓群分布図(1/100万)

A-氷見臨海地区、B-小矢部川左岸地区、C-奥羽丘陵地区

No	地区	遺跡名	個数	所在地	備考
01	水見臨海	臨方	8基	水見市臨方	(熊無新保)
02		敷田薬師	3基	水見市敷田	
03		阿尾瀬戸ヶ谷内	3基	水見市阿尾	
04		阿尾城山	11基	水見市阿尾	
05		加納	58基	水見市加納	
06		新保	2基	水見市新保	
07		朝日谷内	1基	水見市幸町	
08		坂津	36基	水見市十二町	
09	小矢部川左岸	院内東	1基	高岡市二上院内	舞谷城ヶ平43基、馬場9基 所在未確認 2段に並ぶ横穴墓群？
10		二上	4基	高岡市二上	
11		頭川ヶ平	23基	高岡市頭川・岩坪	
12		江道	20基	高岡市江道	
13		城ヶ平	52基	福岡町舞谷・馬場	
14		加茂	25基	福岡町加茂	
15		鳥島	1基	福岡町鳥島	
16		田川白土山	?基	小矢部市田川	
17		田川三角山	?基	小矢部市田川	
18		田川城ヶ峰	?基	小矢部市田川	
19	桜町	11基	小矢部市桜町		
20	奥羽丘陵	番神山	18基	富山市安養坊	20基近くで構成か？ ？
21		金屋麻の穴	12基	富山市金屋	
22		新町	1基	婦中町新町	

第4表 県下の横穴墓群一覧表

横穴墓の明確な改葬例としては初めてのものである。なお、この通有の大きさの改葬墓以外に、小型改葬墓とされるものも確認された。

東北南部(常陸・石城地域)は、改葬墓を主体的に伴う横穴墓群の所在地とされている。そしてこれらの改葬様式の横穴墓がこの地で確立したとするより、北部九州(特に筑前地域)との関連が指摘できるとされている。江道横穴墓の改葬墓についてもここから伝播した可能性がある。また江道横穴墓群における九州からの影響が窺えるものとして、外墳の線刻面と骨骸がある。

造墓の時期

横穴墓群や横穴式石室の時期を決めるのは土器を基準とするが、追葬を意識して構築されているため、出土土器の時期が直接墓の構築時期を示さず、追葬等の時期を示す場合もある。県下の横穴墓出土土器をみると大きく2つの時期に区分される。1つは6世紀後半頃のものであり、もう1つは7世紀後半頃のものである。7世紀前半頃のものはいくつか少ない。6世紀後半頃とされる土器の出土をもって、このころから造墓がなされ

たとされ、7世紀後半頃とされる土器の出土をもって、7世紀後半頃の造墓とし、さらに7世紀前半頃の造墓を推定している。6世紀後半頃とされる土器については、型式の設定をやや古くし過ぎていると思う。また近年6世紀末～7世紀前半頃とされる土器が再検討されるとともに、やや新しくする傾向にある。このことから、6世紀後半としているものは、一部に6世紀後半のものはあるにしても、大半は6世紀末～7世紀前半頃のものと考えたい。7世紀後半頃のものについては、大津京や藤原京の出土土器と比較対照すれば、大きな年代的齟齬はないものと思われる。ただし、これらを造墓時のものとするか、追葬時のものとするかが問題である。土器以外に横穴墓を新しくする要素が乏しいことから、7世紀後半頃のものとは追葬のものと考えたい。

古墳と横穴墓

5世紀後葉以後は、古墳時代の中でも後期と区別される時期である。これは横穴式石室の採用と小規模な古墳の群在に特徴がある。横穴墓はこの横穴式石室を有する小規模な古墳の変種であり、群在しており、古墳時代後期的なものと言え得る。古墳時代後期は、前方後円墳の消滅、造墓の規制、埋葬方式・觀念の変更などによって、推古朝（6世紀末～7世紀前葉）を境に区分され、終末期とされる。県下における後期～終末期古墳の内、発掘調査などによって年代的に明確な古墳は、5世紀後葉～6世紀後葉のものである。一方横穴墓が盛行するのは6世紀末以降であり、両者が果たしてどの程度共存していたか明確ではない。位置的には、1つの丘陵の屋根に古墳があり、斜面に横穴墓がある例は、院内東横穴墓を始めいくつか存在する。

横穴墓の分布する所には、前期～後期の古墳もあり、有力者の存在が予想される地区である。そして、その大半が律令期の射水郡と砺波郡に位置している。また射水郡に近い所ものを加味すれば、射水郡を中心に分布しているとも言える。越中国府は射水郡に設置されたが、これには、古墳時代以来の在地の状況が反映しているとも受け取れる。

5. おわりに

当「取川城ヶ平横穴墓群」は、昭和57・58年度に確認された横穴墓20基（第1～12・14～21号墓）と今回の調査にかかる横穴墓3基（第301～303号墓）との計23基の横穴墓から構成されるものである。

今回の調査の3基は、時期を特定できる出土遺物がなく、埋葬人骨も確認されなかったが、形態等より古代の横穴墓と判断したものである。昭和57・58年度の一群より約60m離れており、これらとは別の支群と言えよう。昭和57・58年度の調査地区の一群に比べて、密集はせず疎らな地区である。ただし中間地帯の状況が不明であり、未確認の横穴墓の存在も予想され、横穴墓群全体としての分布状態や各支群ごとの把握は分明にはできない。当横穴墓群全体の分布状態については明確にはできないと言え、今回の横穴墓群は主要な地区（支群）とは思われない。主要な横穴墓群より派生してきた一支群と理解できよう。すなわち期的にも古い一群ではなく、新しい一群と考えたい。

小型の横穴墓である第303号墓については、改葬墓としての性格を与え得る可能性があるものであり、当横穴墓群における埋葬様式を知る上で興味深いものである。

当横穴墓群の周辺部においては、平野部へ突出する形の丘陵部、すなわち丘陵の末端部の尾根上には古墳が構築されている場合が多い。当地にも丘陵部には「城ヶ平古墳群」とでも称し得るような古墳群が存在していた可能性が高いと言える。

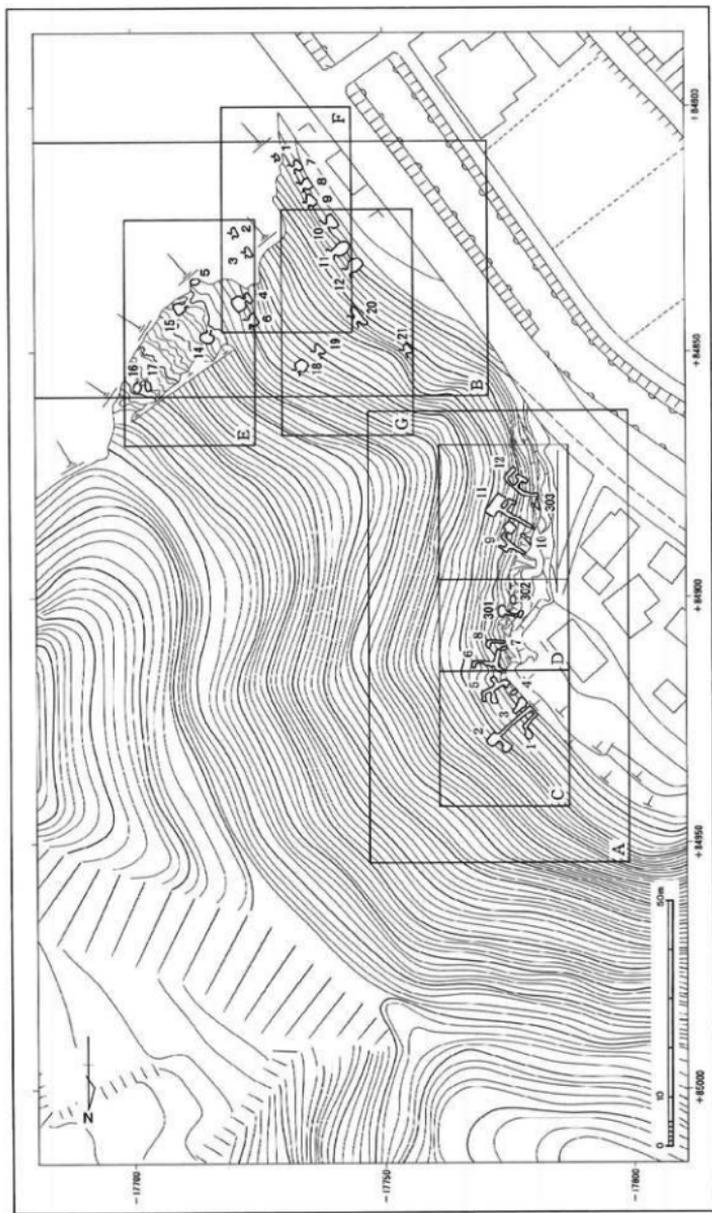
参考文献

- 池上 悟 1980 『横穴墓』（考古学ライブラリー6） ニュー・サイエンス社
- 池上 悟 1991 『東国の横穴式石室と横穴墓』 紙余舎
- 池上 悟 2000 『日本の横穴墓』 雄山閣
- 上山 薫 1993 『横穴墓』『神奈川県の考古学の問題点とその展望』 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 大塚初重他 1991 『関東横穴墓遺跡検討会資料』 茨城県考古学協会
- 大野文郎他 1984 『富山県高岡市西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報Ⅰ』 高岡市教育委員会
- 大野文郎他 1985 『富山県高岡市西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報Ⅱ』 高岡市教育委員会
- 大野文郎他 1986 『富山県高岡市西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報Ⅲ』 高岡市教育委員会
- 大野 究 1989 『臨方横穴群』 氷見市教育委員会
- 大村 正之 1923 『加納横穴墓群』『富山県史跡名勝天然記念物調査会報告』第4号 富山県
- 大村 正之 1931 『奥羽山古墳横穴群』『富山県史跡名勝天然記念物調査報告』第11号 富山県学務部
- 岡崎 卯一 1967 『富山市安曇坊番神山の横穴』『大鏡』第3号 富山考古学会
- 岡崎 卯一 1968 『富山市安曇坊横穴第7号墓の調査』『大鏡』第4号 富山考古学会
- 駒見和夫他 1988 『越の横穴墓とその背景』『古代集落の諸問題』 玉口時雄先生古稀記念事業会
- 京谷 準一 1966 『国古小史』 国古小史刊行委員会
- 酒井重洋他 1985 『富山県氷見市藪田築師中世墓発掘調査報告書』 氷見市教育委員会
- 坂井誠一他 1974 『角川日本地名大辞典16-富山県』 角川書店
- 高瀬重雄他 1957 『高岡市江道横穴古墳群調査報告書』 高岡市史料編纂委員会
- 高瀬重雄他 1994 『日本歴史地名大系第11巻-富山県の地名』 平凡社
- 地崎 淳一 1969 『黎明期の福岡』『福岡町史』 福岡町役場
- 西井 龍儀 1983 『二上山周辺の古墳』『昭和57年度高岡市埋蔵文化財調査概報』 高岡市教育委員会
- 林 喜太郎 1930 『熊無村横穴古墳』『富山県史跡名勝天然記念物調査報告』第10号 富山県学務部
- 藤山富士夫 1976 『富山市古沢・金原地内古墳概要調査報告書』 富山市教育委員会
- 藤田富士夫 1981 『富山県における群集墳期の古墳文化』『富山史壇』第76号 越中央壇会
- 藤田富士夫 1983 『日本の古代遺跡13-富山』 保育社
- 藤田富士夫 1987 『古墳時代』『富山市史通史<上巻>』 富山市
- 藤田富士夫 1997 『金原陣の穴横穴墓群』『越中町史資料編』 越中町
- 古岡 英明 1972 『古墳時代』『富山県史-考古編』 富山県
- 古岡 英明 1972 『城ヶ平・馬場横穴墓群』『富山県史-考古編』 富山県
- 古岡英明他 1991 『たかおか-歴史との出会い-』 高岡市
- 逸見 護他 1983 『富山県高岡市頭川城ヶ平横穴墓群第Ⅰ次緊急発掘調査概要』 高岡市教育委員会
- 逸見 護他 1984 『富山県高岡市頭川城ヶ平横穴墓群第Ⅱ次発掘調査報告』 高岡市教育委員会
- 麻柄 幸子 1997 『町内の横穴』『越中町史資料編』 越中町
- 湊 隼他 1971 『郷土のあけぼの』『小矢部市史上巻』 小矢部市
- 山森昌真他 1989 『歴史の散歩みち』 三千坊山を中心とした西山を愛する会
- 和田 一郎 1959 『高岡市史』上巻 青林書院新社

報告書抄録

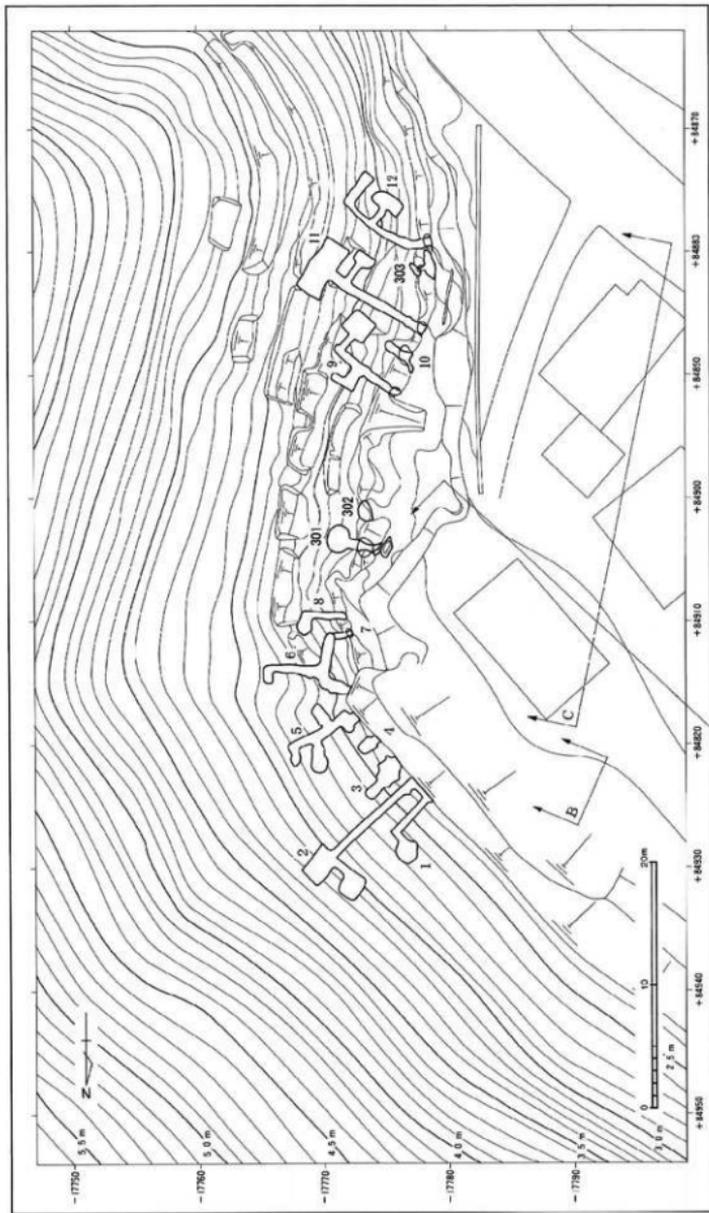
ふりがな	頭川城ヶ平横穴墓群調査報告Ⅲ							
書名	頭川城ヶ平横穴墓群調査報告Ⅲ							
副書名	平成10～12年度、頭川地区雪崩対策事業に伴う調査							
巻次								
シリーズ名	高岡市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第6冊							
編著者名	荒井隆、日沖剛史、山口辰一							
編集機関	高岡市教育委員会							
所在地	〒933-8601 富山県高岡市広小路7番50号			TEL 0766-20-1463				
発行年月日	西暦 2001年3月23日							
ふりがな 所収遺跡	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
頭川城ヶ平 横穴墓群	富山県高岡市 頭川	16202	202050	36° 45' 14"	136° 56' 47"	19981027 / 20000630	310	雪崩対策工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
頭川城ヶ平 横穴墓群	横穴墓	飛鳥時代	横穴墓3基	土師器	従来から知られていた20基に、新たに3基の横穴墓を確認した。			

圖 面



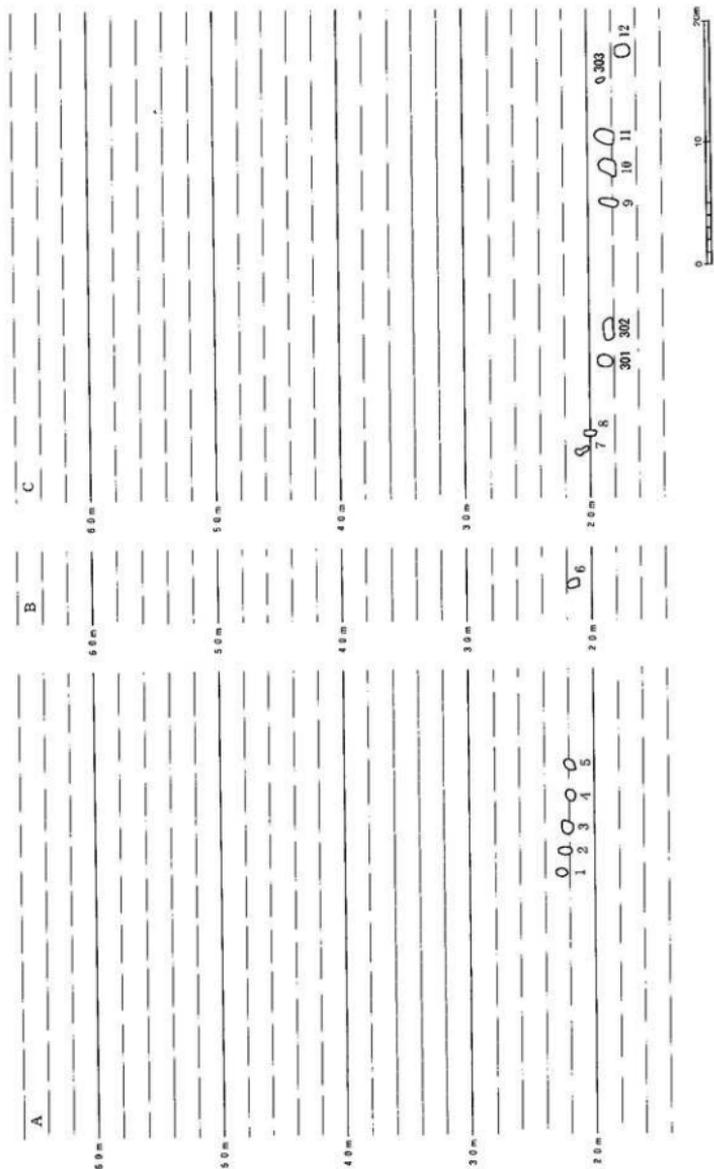
(A—断面2, B—断面8, C—断面4, D—断面6, E—断面10, F—断面12, G—断面14)

断面配置图 縮尺1/1,000



平成10～12年度調査遺構全体平面図

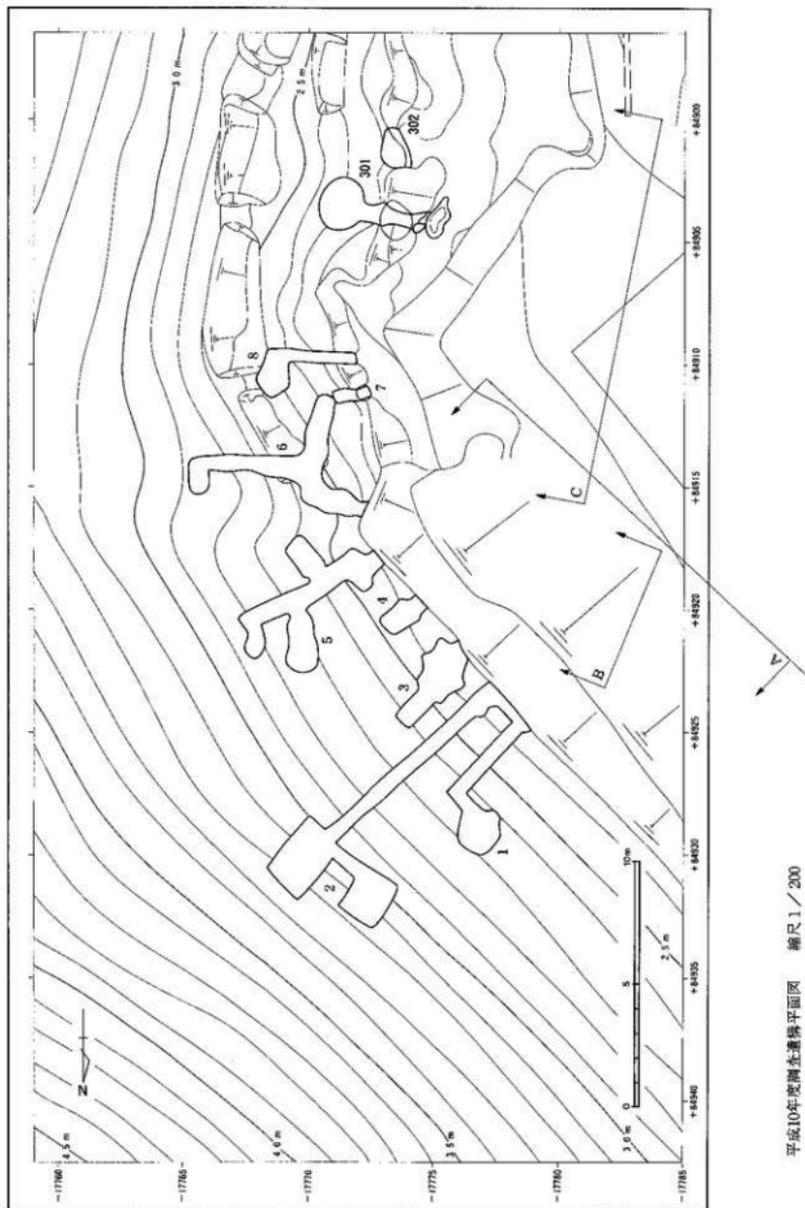
縮尺 1 / 400



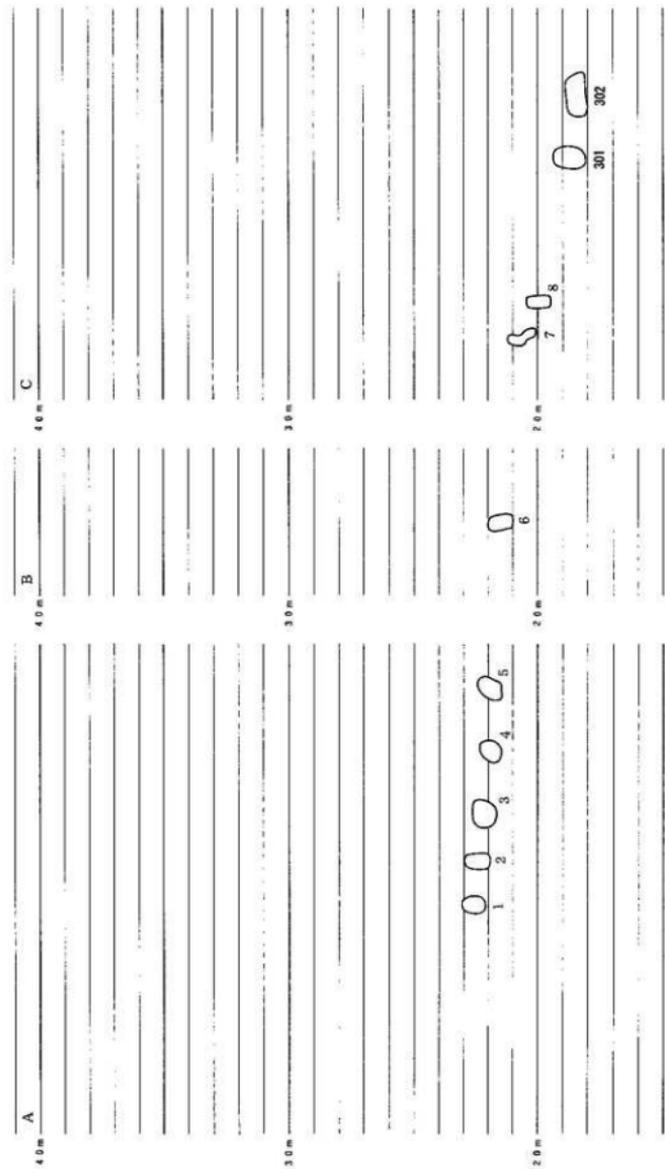
平成10~12年度調査報告全体正面図 縮尺1/400

図面三 遺構実測図

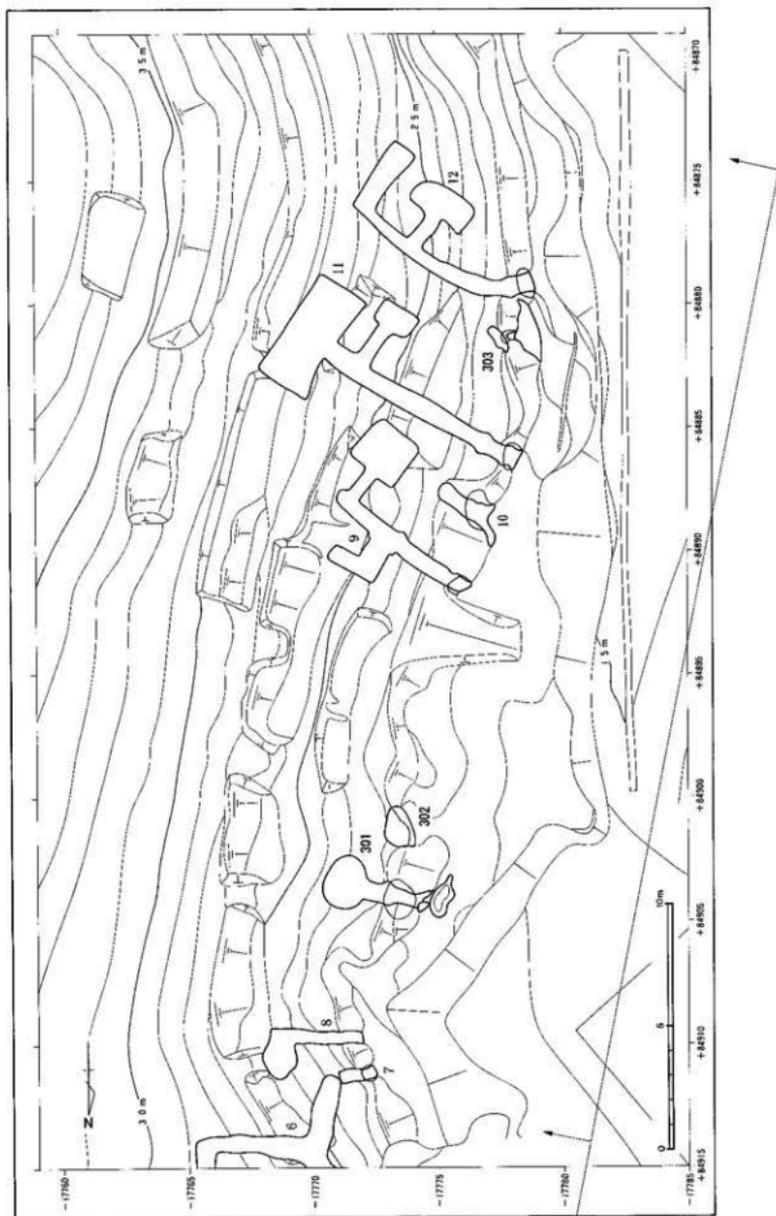
图面四 遺構美測図



平成10年度調査遺構平面図 縮尺1/200

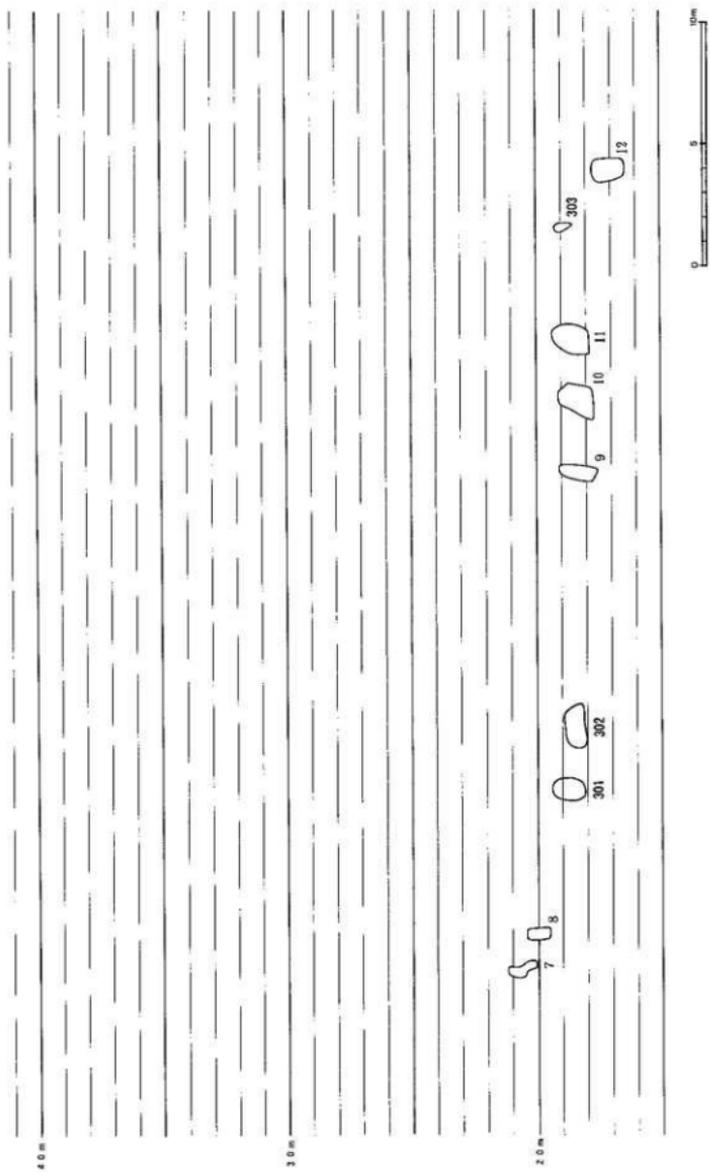


図面六 遺構実測図

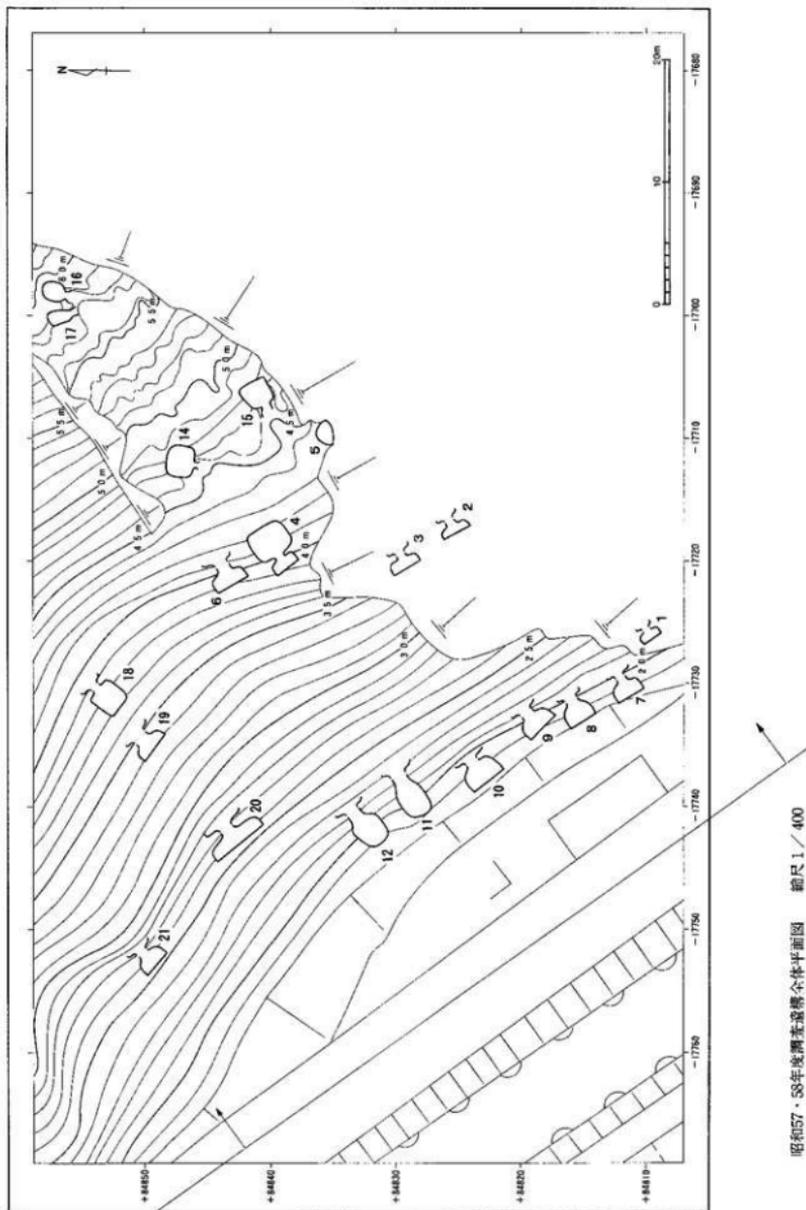


平成11・12年度調査遺構平面図 縮尺1/200

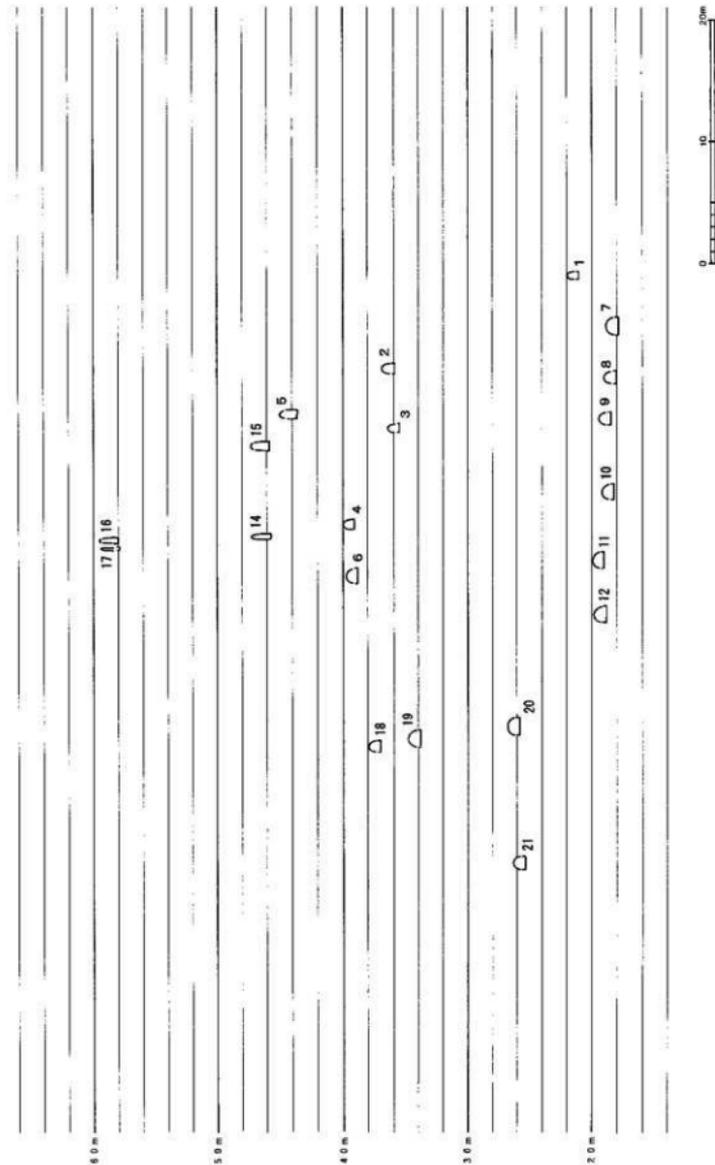
図面七 造構実測図



図面八 遺構実測図



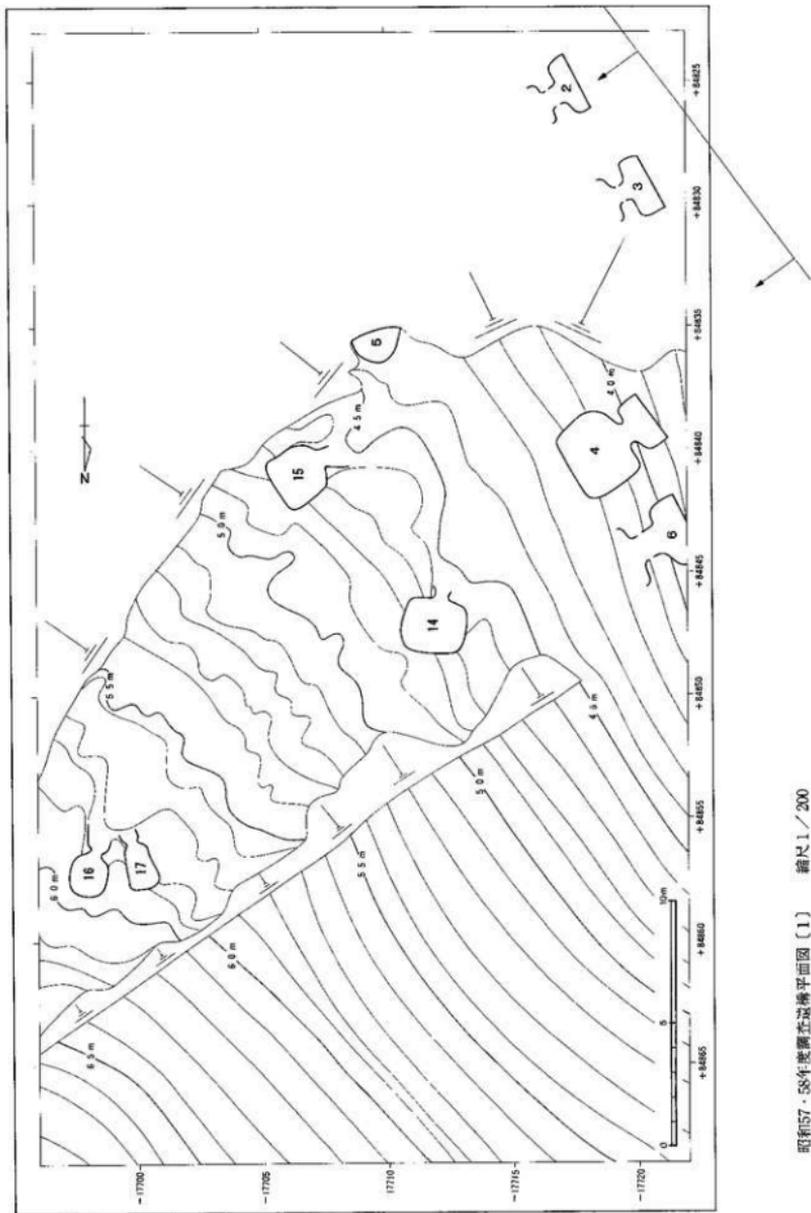
昭和57・58年度調査遺構全体平面図 縮尺 1/400



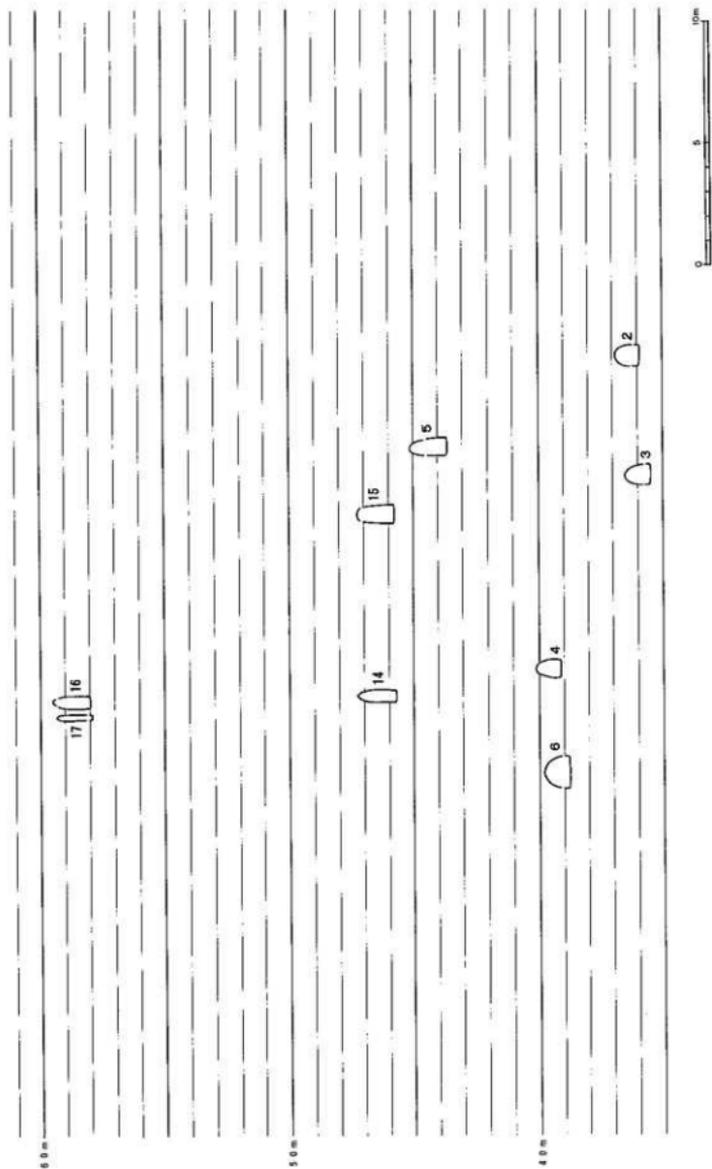
昭和57・58年度善光寺講堂全体正面図 縮尺1/400

図面九 遺構実測図

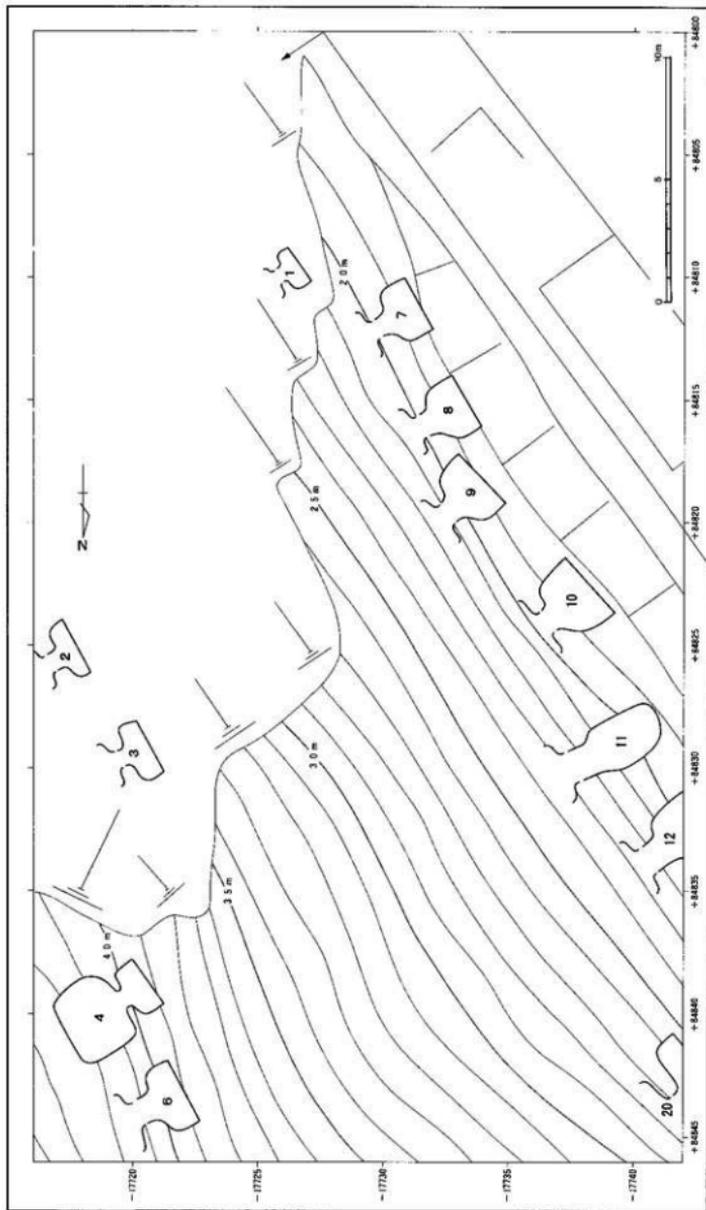
図面一〇 遺構実測図



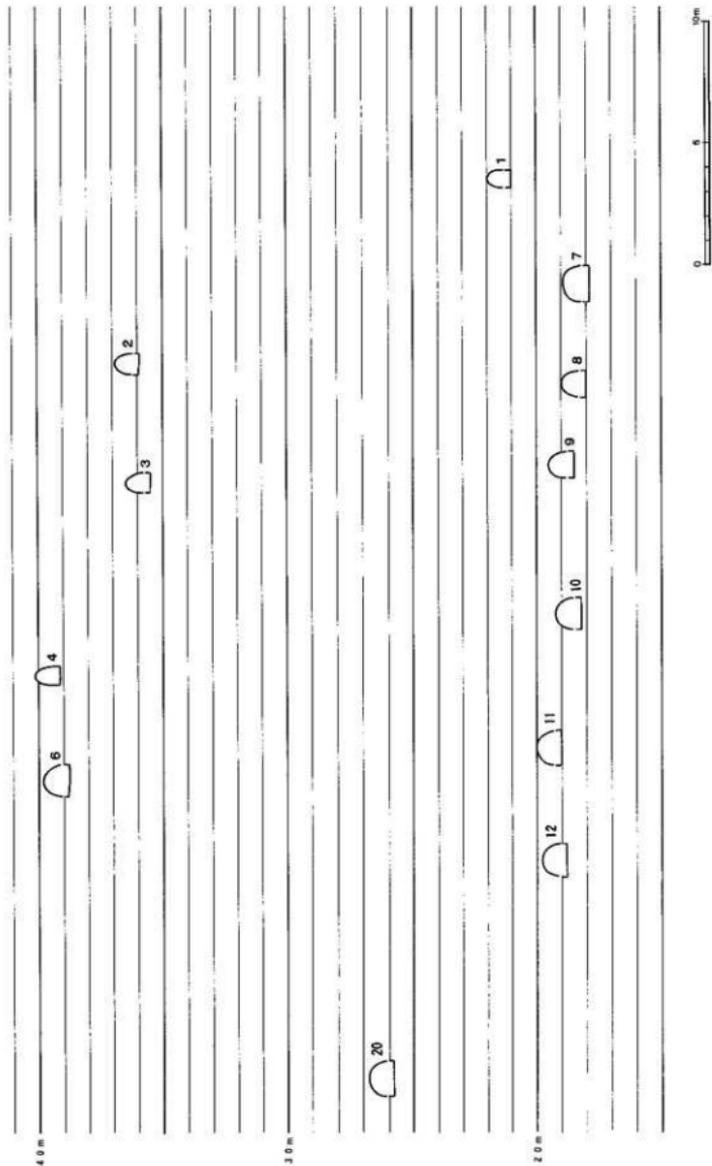
昭和57・58年度調査遺構平面図(1) 縮尺1/200



図面二 遺構実測図

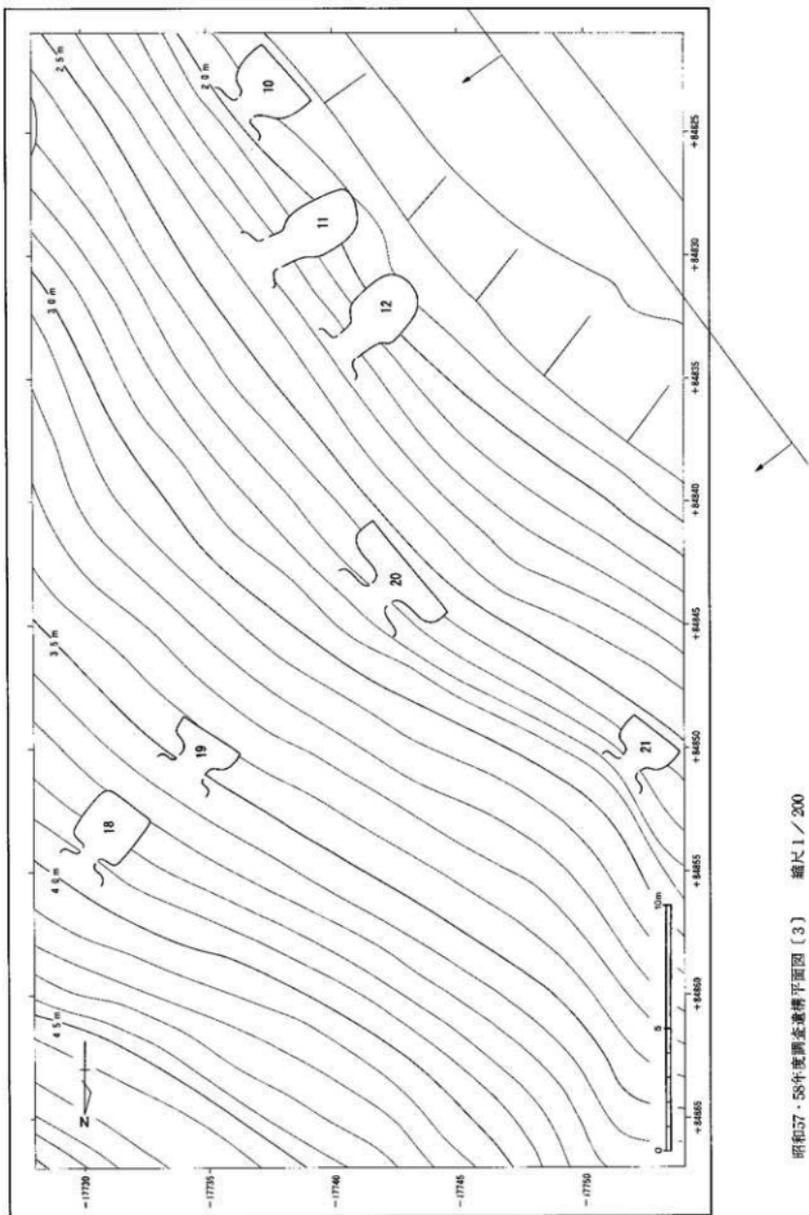


昭和57・58年度調査遺構平面図(2) 縮尺1/200

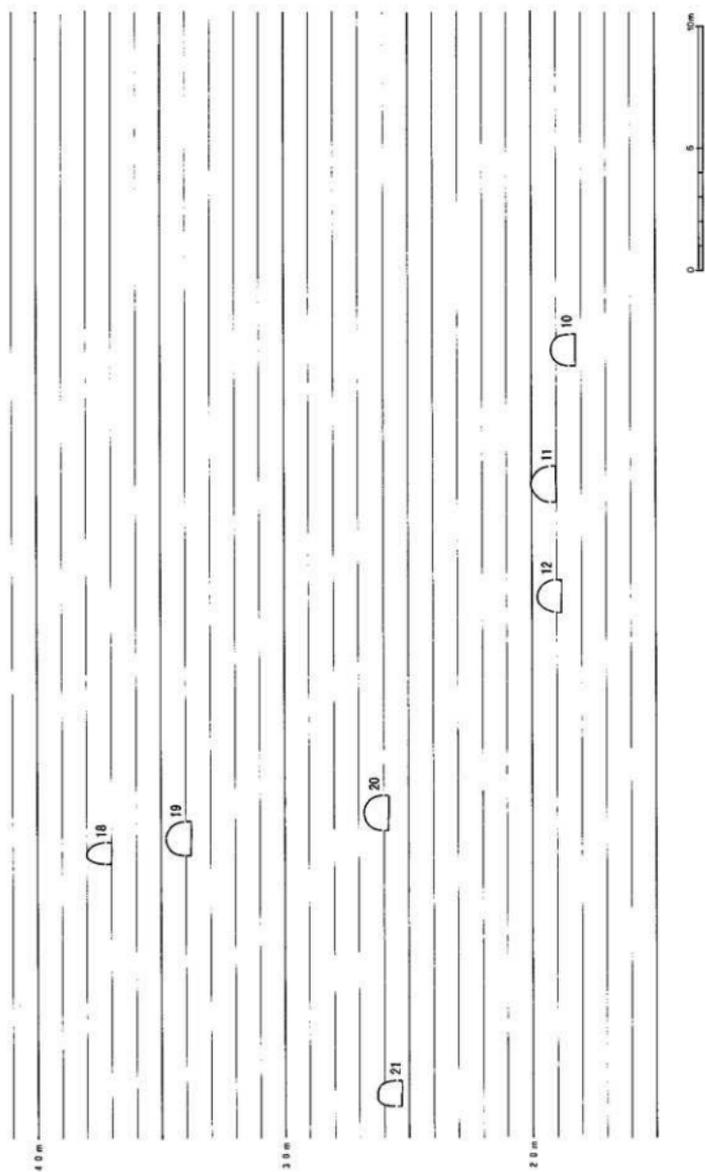


昭和57・58年度障害者造形正面図〔2〕 縮尺1/200

図面一四 遺構実測図

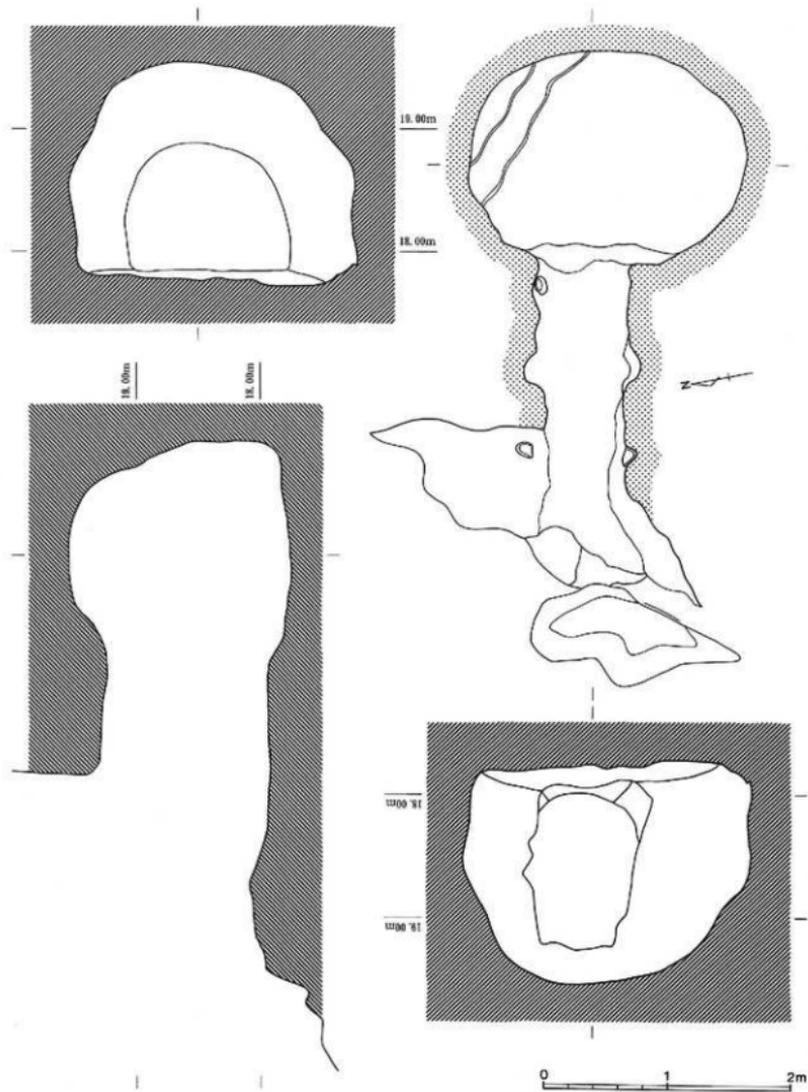


昭和57・58年度調査遺構平面図(3) 縮尺1/200



昭和57・58年度調査遺構実測図〔3〕 縮尺1/200

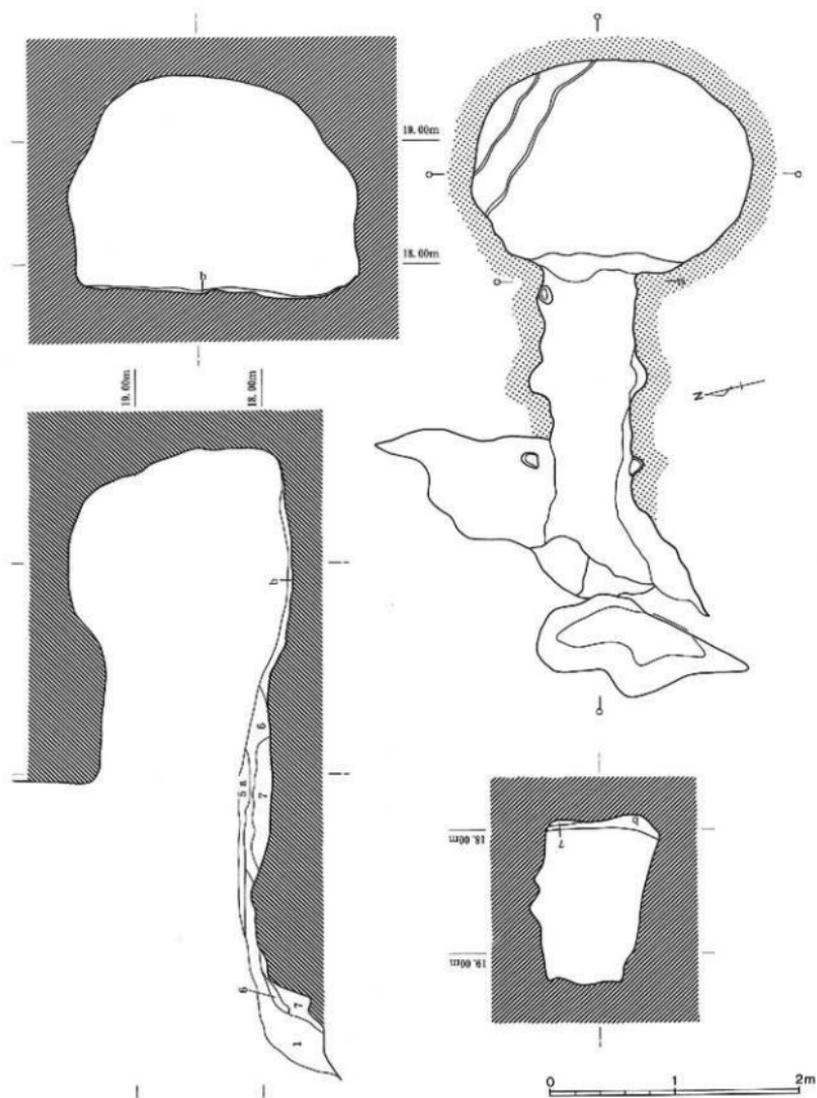
図面一六 遺構実測図



第301号基全体図

縮尺 1/40

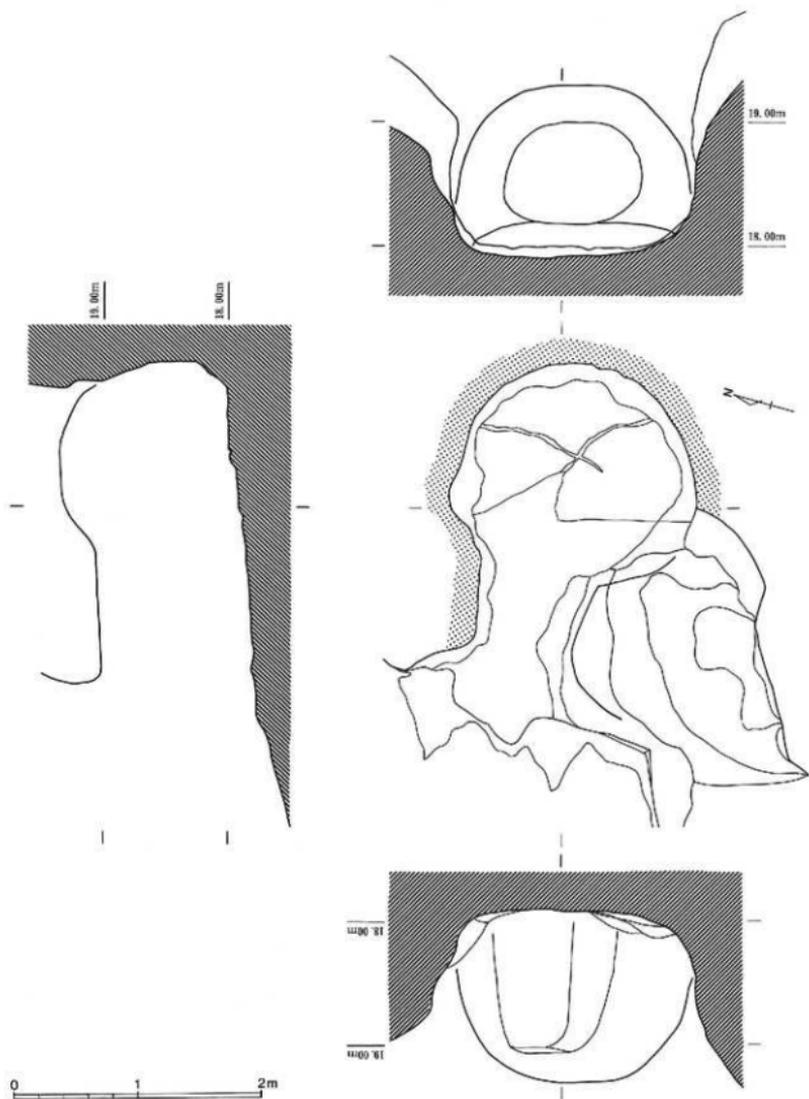
図面一七 遺構実測図



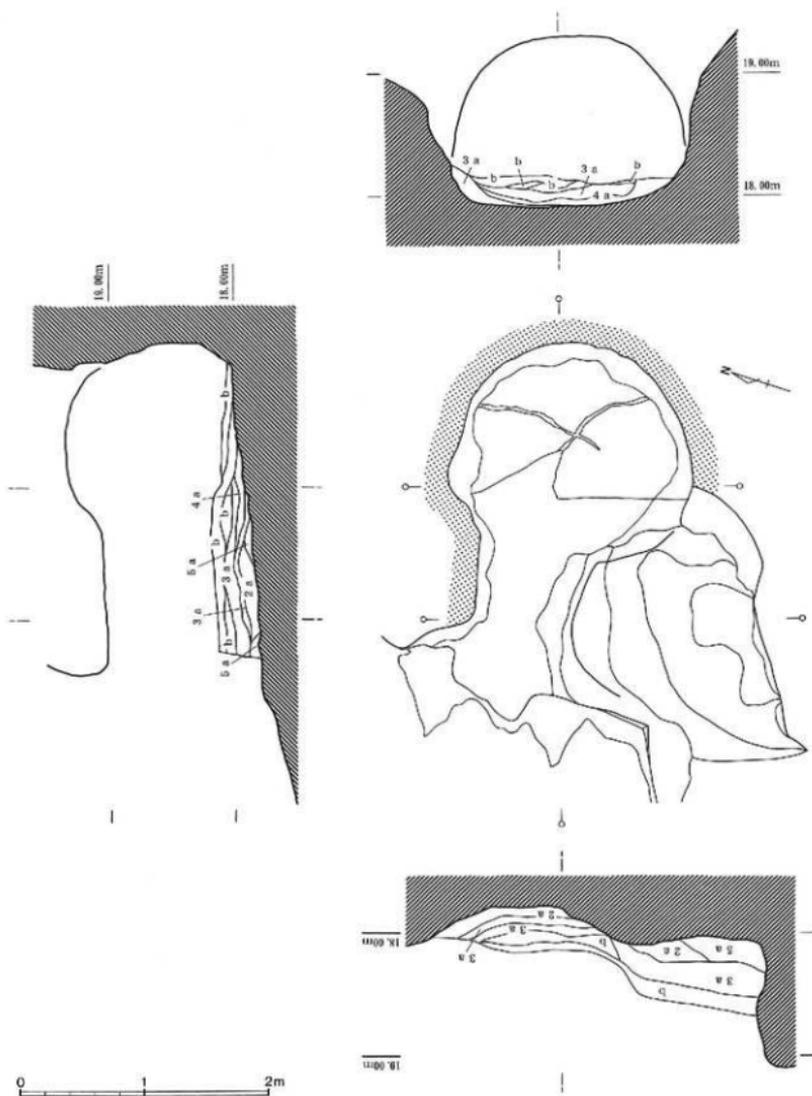
第301号基上層断面図

縮尺 1/40

図面一八 遺構実測図



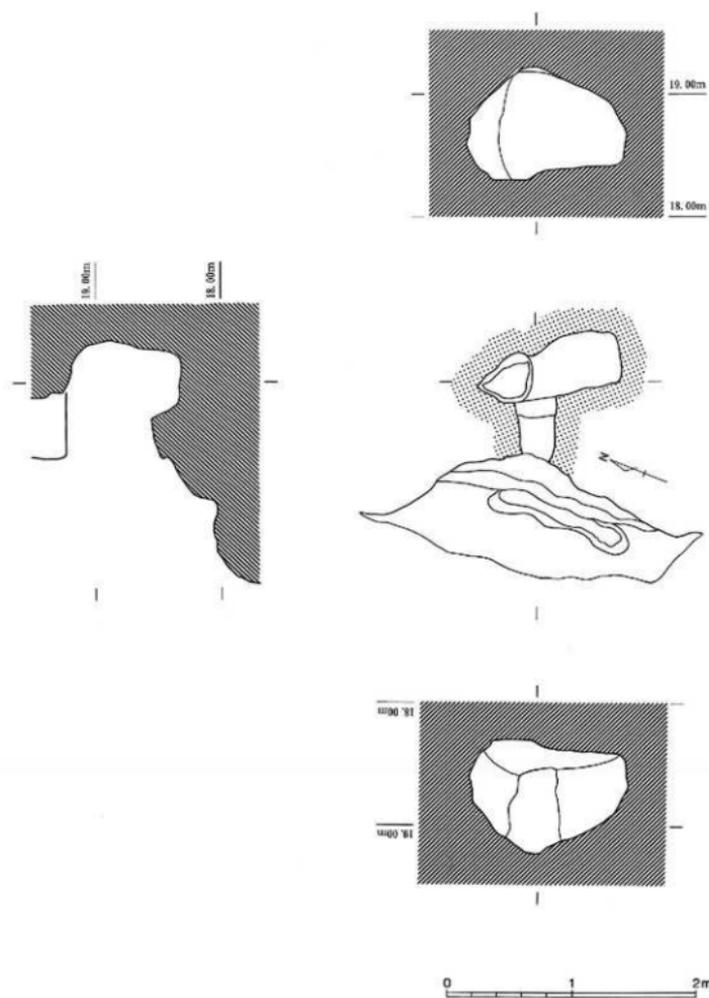
圖面一九 遺構実測図

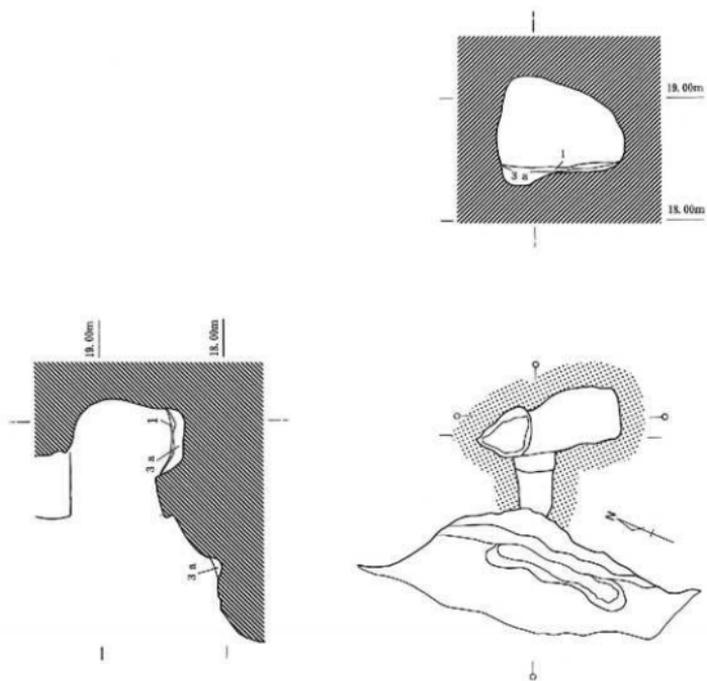


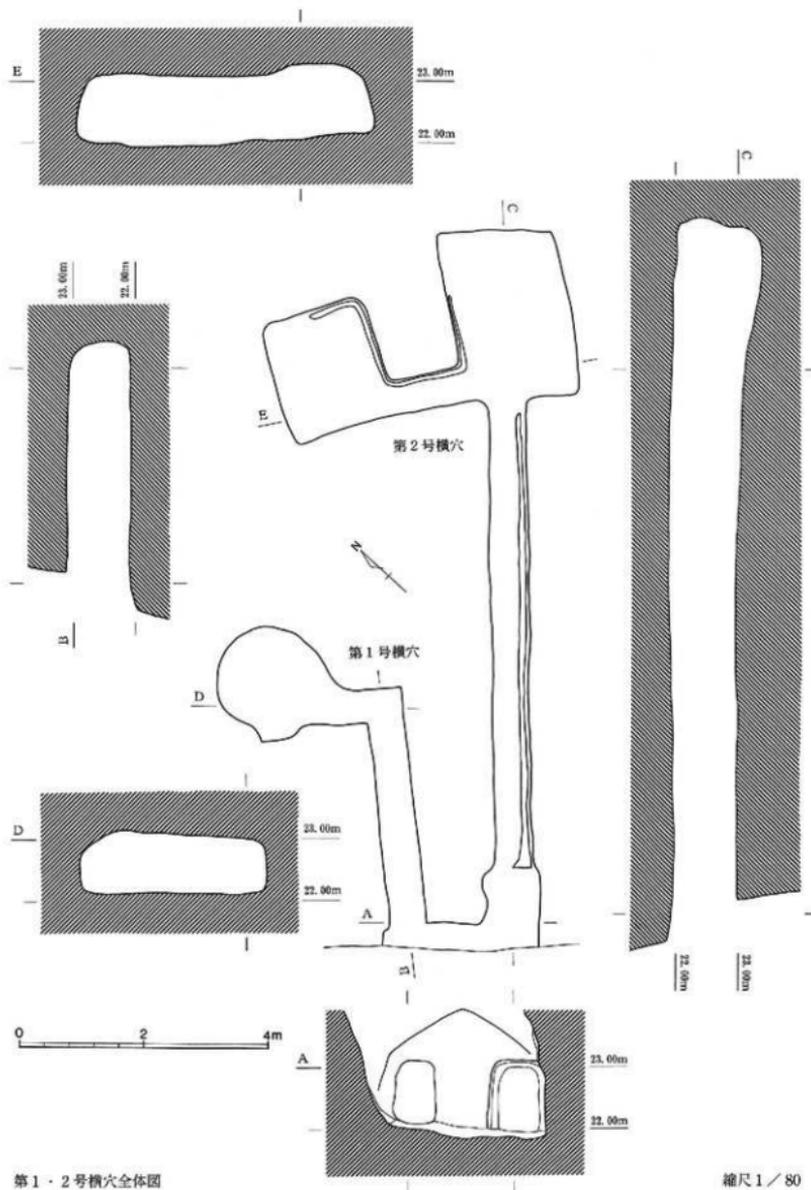
第302号墓土層断面図

縮尺 1/40

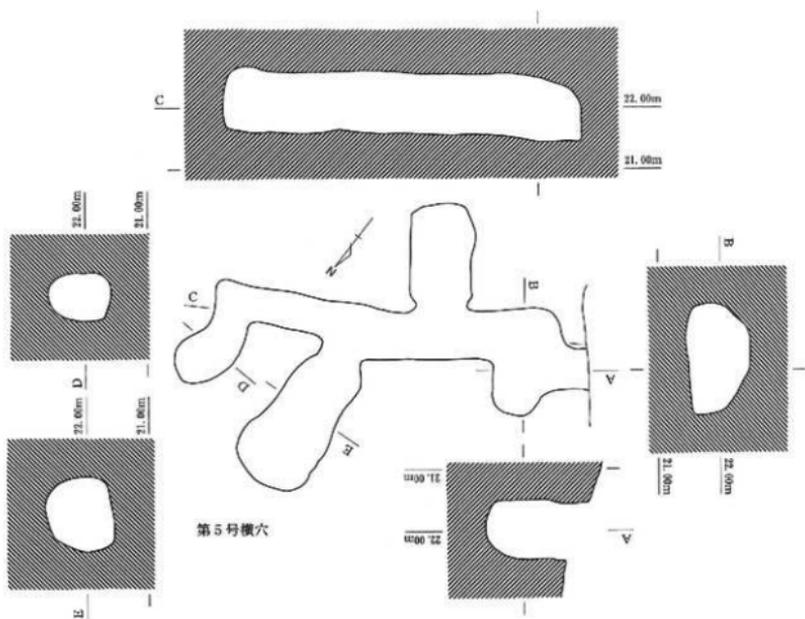
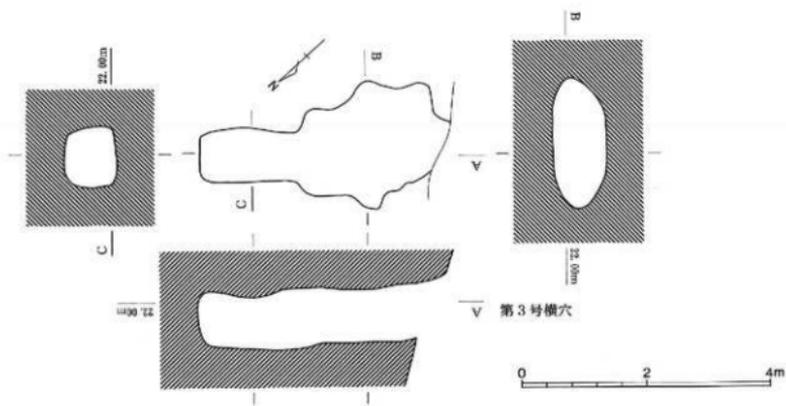
圖面二〇 遺構実測図



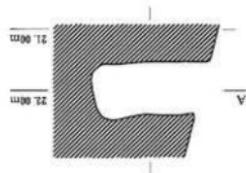
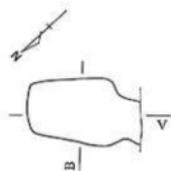
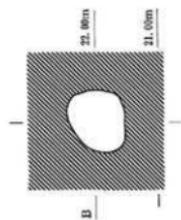




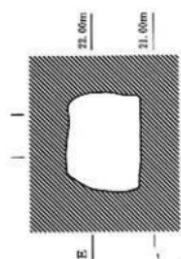
第1・2号横穴全体図



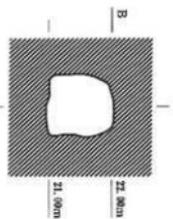
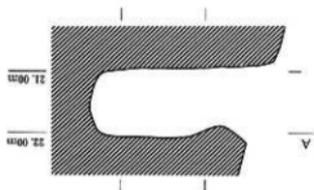
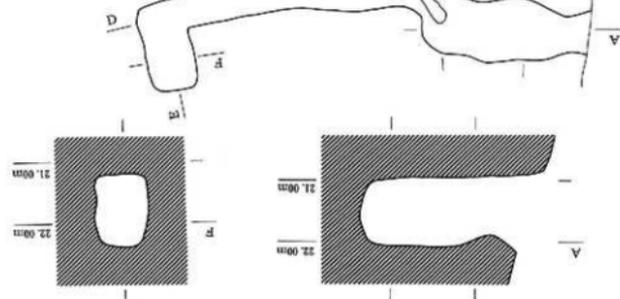
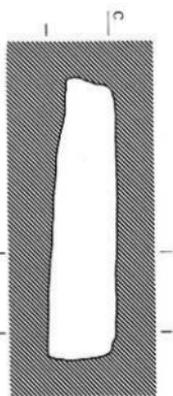
第3・5号横穴全体図



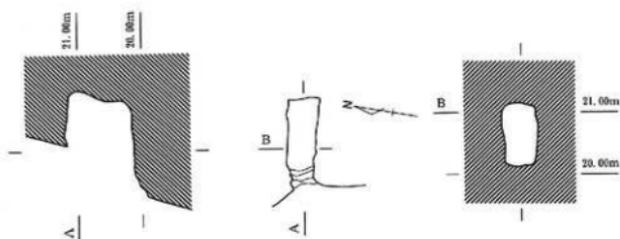
第4号横穴



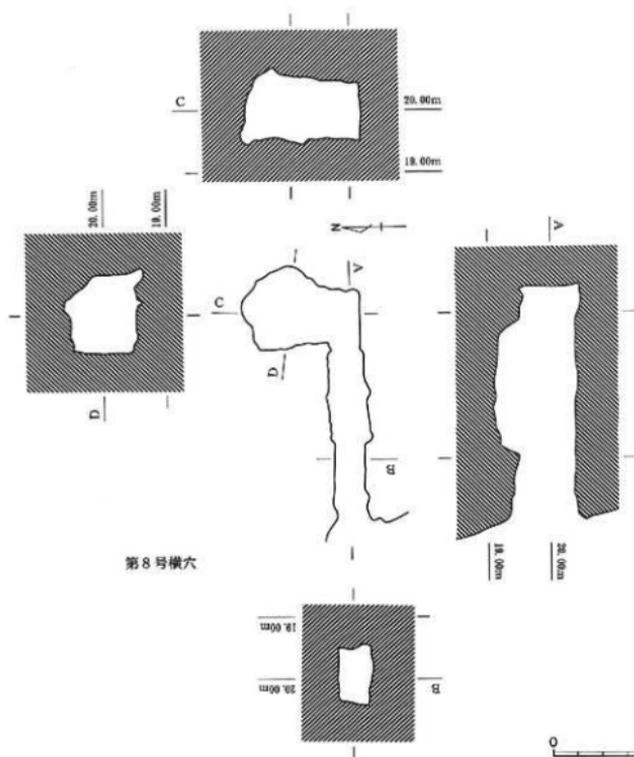
第6号横穴



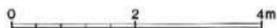
第4・6号横穴全体図



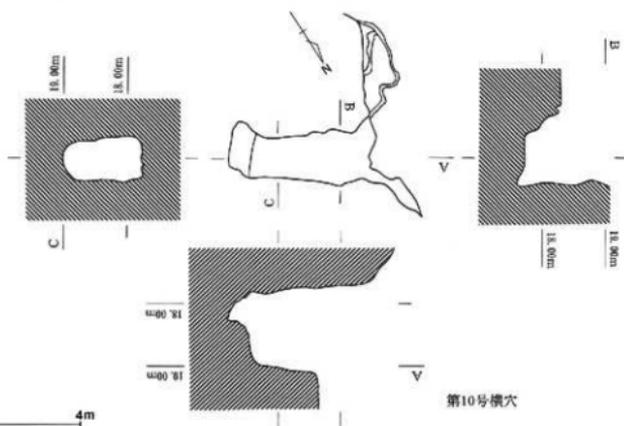
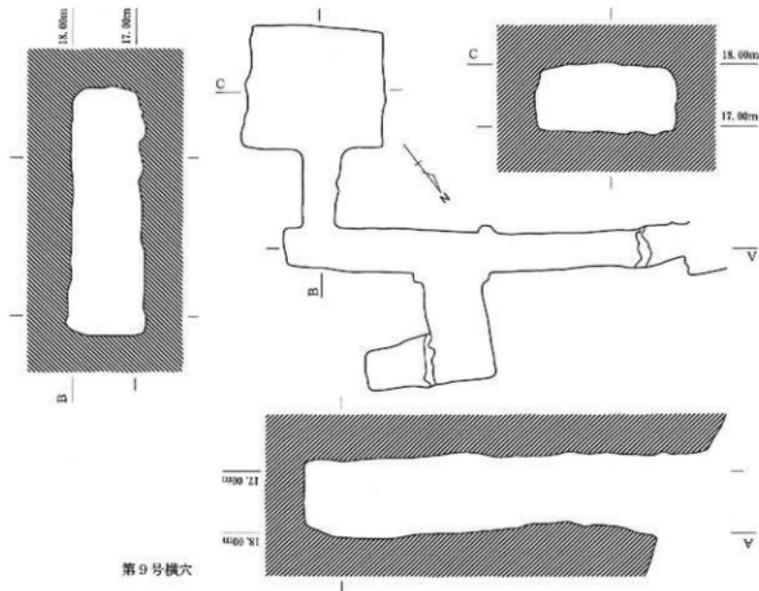
第7号横穴



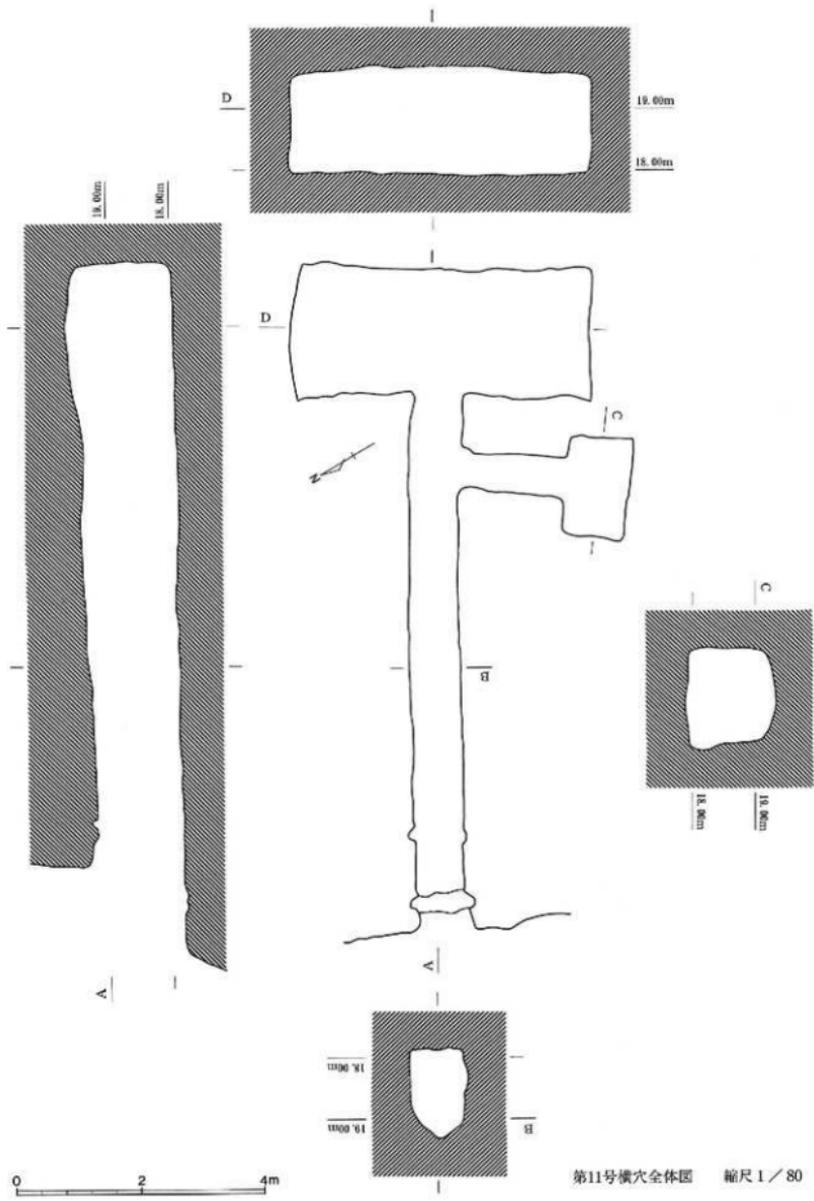
第8号横穴



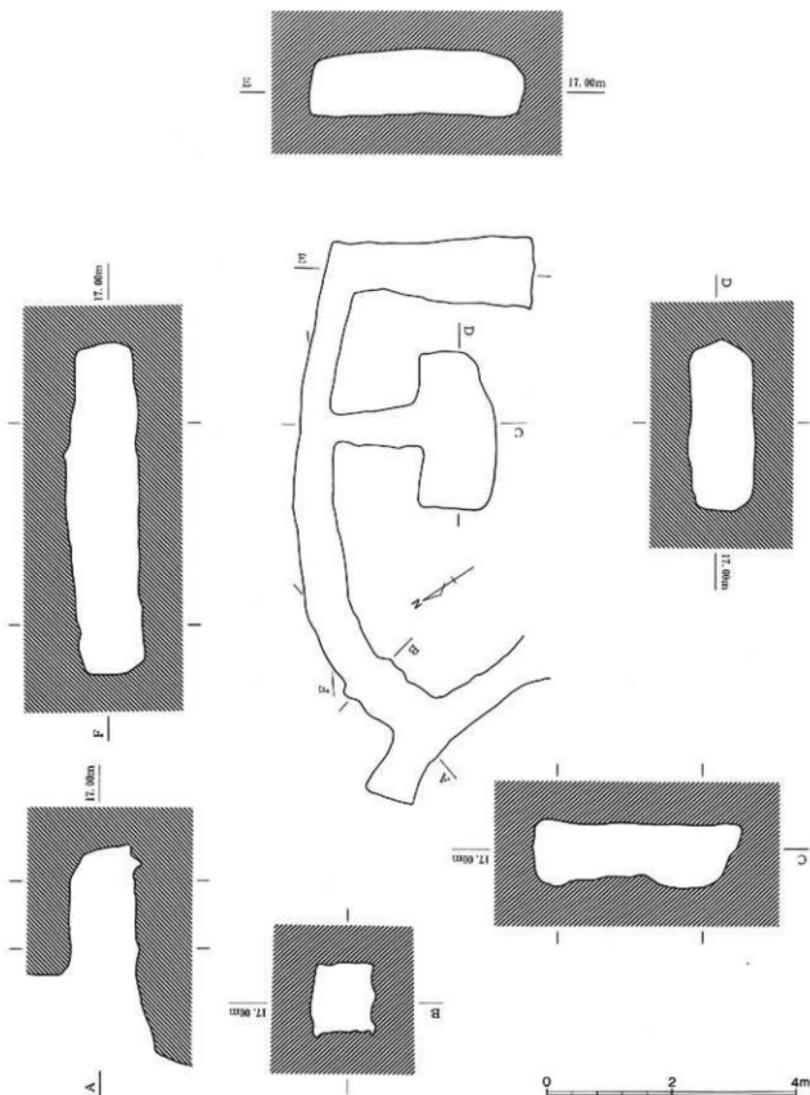
図面二六 遺構実測図



図面二七 遺構実測図



第11号横穴全体図 縮尺1/80



第12号横穴全体図

縮尺 1 / 80

图 版



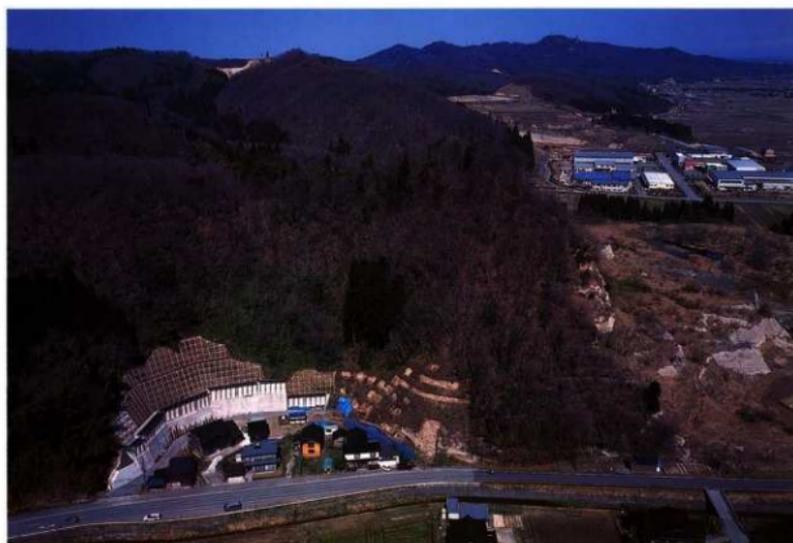
1. 遺跡遠景（北西）



2. 遺跡遠景（南東）



1. 遺跡全景 (西)



2. 遺跡全景 (南西)



1. 平成10年度調査地区遠景（南西）



2. 平成10年度調査地区近景（西）



1. 平成11・12年度調査地区全景（南西）



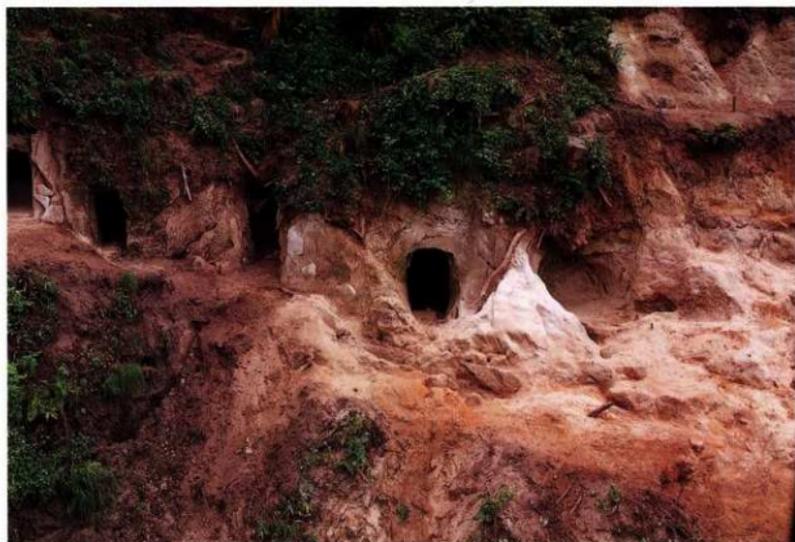
2. 平成11・12年度調査地区全景（西）



1. 平成11・12年度調査地区近景（北西）



2. 平成11・12年度調査地区近景（西）



1. 第301・302号墓全景(西)



2. 第303号墓全景(北西)



1. 第301号墓近景(西)



2. 第302号墓近景(西)



1. 昭和57・58年度調査地区全景（南）



2. 昭和57・58年度調査地区全景（南西）



1. 遺跡遠景 (西)



2. 遺跡遠景 (南西)



1. 平成10年度調査地区遺構確認状態（南西）



2. 平成10年度調査地区遺構確認状態（南西）



3. 平成10年度調査地区協議状況（南西）



1. 平成10年度調査地区遠景（西南西）



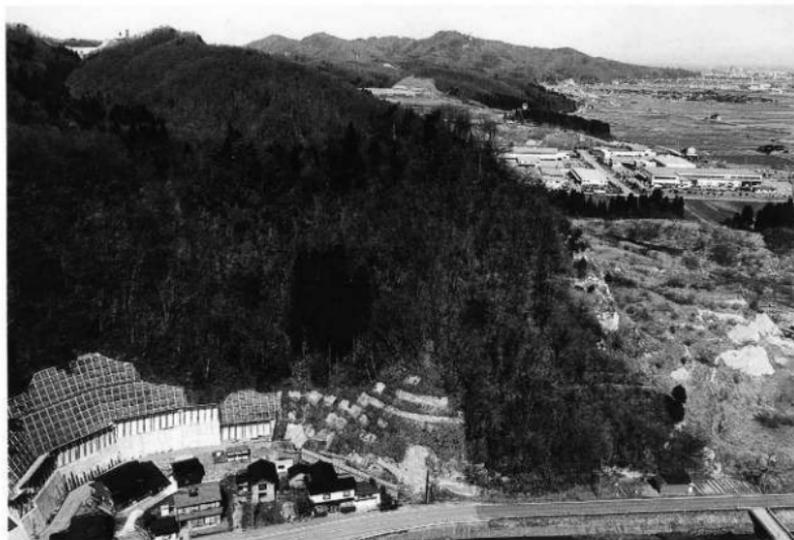
2. 平成10年度調査地区遠景（南西）



1. 平成10年度調査地区近景 (南西)



2. 平成10年度調査地区近景 (西)



1. 平成11・12年度調査地区遠景(南西)



2. 平成11・12年度調査地区遠景(西)



1. 平成11・12年度調査地区
調査前風景（北西）



2. 平成11・12年度調査地区
調査前風景（南）



3. 平成11・12年度調査地区
調査前風景（北西）



1. 平成11・12年度調査地区全景（西）



2. 平成11・12年度調査地区全景（西）



1. 平成11・12年度調査地区近景(西)



2. 平成11・12年度調査地区近景(北西)



1. 平成11年度試掘調査風景
(北西)



2. 平成11年度試掘調査風景
(北)



3. 平成11年度試掘調査風景
(南西)



1. 平成11年度試掘調査風景
(北西)



2. 平成11年度試掘調査風景
(南西)



3. 平成11年度試掘調査風景
(南西)



1. 平成12年度本調査風景
(北)



2. 平成12年度本調査風景
(南)



3. 平成12年度本調査風景
(北西)



1. 第301・302号墓全景(西)



2. 第301・302号墓近景(西)



1. 第301号墓全景(西)



2. 第301号墓全景(西南西)



1. 第301号墓玄室検出状態
(西)



2. 第301号墓見返り(東)



3. 第301号墓調査風景
(西南西)



1. 第302号墓全景（南西）



2. 第302号墓全景（南西）



1. 第302号墓確認狀態
(西)



2. 第302号墓調査風景
(南西)



3. 第302号墓調査風景
(南西)



1. 第303号墓全景(西)



2. 第303号墓全景(北西)



1. 第303号墓確認状態
(西)



2. 第303号墓調査風景
(北)



3. 第303号墓調査風景
(西)



1. 第1・2号横穴全景(南)



2. 第1・2号横穴全景(西)



1. 第1号横穴全景(南西)



2. 第2号横穴全景(南西)



3. 第3号横穴全景(南西)



1. 第4号横穴全景(南西)



2. 第5号横穴全景(南西)



3. 第6号横穴全景(西)



1. 第7号横穴全景(西)



2. 第8号横穴全景(西)



3. 第9号横穴全景
(西北西)



1. 第10号横穴全景
(西北西)



2. 第11号横穴全景
(西北西)



3. 第12号横穴全景(西)

高岡市埋蔵文化財調査報告第6冊

願川城ヶ平横穴墓群調査報告Ⅲ

2001年3月23日

発行者 高岡市教育委員会
富山縣高岡市広小路7番50号

印刷所 株式会社モトヨシ美術印刷
富山縣高岡市石巻本町768
